

現代語訳 河合榮治郎『国民に懇う』（承前）

芝 田 秀 幹

目次

- 訳者はしがき
- 序
- 一 はしがき
- 二 ただ二途あるのみ
- 三 政府への進言
- 四 国民への警告（以下、本号）¹
- 五 国内分裂を警戒せよ
- 六 日本の使命
- あとがき

四 国民への警告

今や我々の同胞は東アジアの各地において、苦しい戦陣の生活を続けている。私の昔の学生も、あるいは満洲に中国北部にあるいは中国南部に海上に散在してしばしば陣中生活の消息を送ってくる。その何人かはノモンハンの戦争で戦死した²。これらの手紙が一樣に書いていることは、いざ敵軍と対戦する間際には、胸中何もなく、全く無念無想だということである。彼らすべては親や兄弟を残し、あるものは妻や子を置いて、異国で命を賭して戦っている。彼らには為し遂げたいと思う仕事も残っていよう。将来あこがれていた幻想もあったろう。故郷に残した両親の身を考えると、戦死の報を聞いた時の悲痛を思いやるだろう、愛する妻子を寡婦孤児とすることを思えば、断腸の苦しさがあるろう。だが彼らの目標はただ君国の上にある、この一念の前に、他の一切のものが淡雪のように消える。彼ら

は「個」を捨てて「全」に生きようとするのである。ここに自己犠牲という言葉の最も端的な実例がある。しばしば哲学者は戦争は道徳心を高揚させるというが、その意味するところはここにあるのであろう。戦時の国民の覚悟は、戦場の臨む武士の一念を、銃後に生かすことにある³。

昭和6年に満洲事変がはじまってから、非常時という言葉が語られた。昭和12年に日本中戦争が起こってから満3年半、我々日本国民は戦争を続けて来た。これを外国から見たならば、日本の団結が強固であるのをうらやむに違いない。しかしこれを内部から眺めた場合、国民の態度が完全だとい切れるだろうか。この戦争の意味を十分理解しているかどうか。誰からもいわれないで自発的に動いているかどうか。いかなる事が起こっても、微塵も揺るがぬ確信を持しているかどうか。私はこれらの点について多少の疑念を感じる。一言にしていえば、今日の日本には道徳的な弛緩がある。さらに極言すれば道徳的な退廃がありはしまいか。今までならばそれでもよかった。しかしたびたび私が繰り返したように、我々の前途は万一步誤れば、深淵に陥るかもしれない危機に臨んでいるのである。英国の市民は毎日毎夜ドイツ空軍の来襲を受けているが、我々の頭上にこそ爆弾は落ちないが、英国よりもより深刻な危険が、我々の前途に待ち構えている。この時に国民の態度がこれで果たしてよいであろうか。今こそ戦場に臨む武士の一念を、身にとどめて味わうべき時である。

戦場に臨む軍人には、自己犠牲の精神がある、「全」のために「個」を捨てていると書いた。同じ国民が戦場に出た時に、自己を犠牲にすることができて、銃後にいる時には会社の利潤を少しでも多く取ろうと考えたり、闇取引を営んだりするのは、一体どこに原因があるのであろうか。そもそも軍人としての自己犠牲が本当なのか、あるいは銃後の金儲けのほうが本当なのか。ここに我々が考慮すべき問題があると思う。ある人はいう、日本人の本来の性質は、利己主義で実利主義で功利主義なのだ。またある人はいう、日本人は本来そうでなかったが、西洋思想の影響を受けてからそうなったのだ。

私は我々同胞が本来利己的であり実利的であるとは思わない、従って軍人の戦場における自己犠牲が例外的なのだとは思わない。我々には「個」を殺して「全」のために生きようとする美しき魂があると思う。そしてその多くの事例が、我が日本の歴史を花のように飾っている。しかしこの魂は日本国民が血族をもってつながる大家族のようなものであることから来たので、極めて自然的に成長したのではない。自然的であるから、理性をもって理論的に組織化されていない。そこに自然的の強さがあると共に、不統一の混乱があるのではない。戦場に臨む軍人は、永きにわたる伝統と訓練を経て来ているから、立派に自己を犠牲にすることができるが、その同じ魂を現代の複雑な諸生活に余すところなく適用するだけの伝統と訓練が行われていない、そこで他方で利己主義だとか実利主義だとかの非難が現れるのであろう。職場の自己犠牲が証明するように、我々には「個」を捨てて「全」につき得る素質はある。ただこの素質はあらゆる部局に拡充されるには至っていないのである。あの戦場の自己犠牲に、我々は同胞の魂に無限の希望を抱くことができる。残る問題はあの魂を発展し強化し拡大することである。

もし我々の生活に見受けられる利己主義や実利主義を、西洋思想の影響だと思えば、非常な誤解であろう。私の経験したところでは、西洋のほうがかえって自己犠牲と自己主張とが、合理的に調和していて、矛盾の醜さが現れていないと思う。米国人を拝金主義とかドル崇拜とかいうけれども、彼らは使うために儲ける、儲けてこれを公共のために使用するので、単に金を尊重するのではない。我々が受け取らない場合に、彼らが金銭を求めるのは、ただ生活の慣習が異なるからで、米国人から見れば、我々の方にも拝金とか利己とか思われる節があるかもしれない。前大戦の末期に私は米国に滞在していたが、当時実業界の人材がたくさん政府の重要な地位に就いていながら、官吏としての俸給を受け取らないで、ただ一ドルだけをもらうことにしていた、そしてこれを「一ドル税」と呼んでいた。一ドルで一生懸命に国のために働く義務という意味である。また十年ほど以前に、イングランド銀行の金の準備額が減ってきたことが新聞に出ると、

政府が命令するのでもなく新聞が宣伝するのでもなく、国民の外国旅行がピタリととまってしまった。金を外国へ流出させまいという心やりである。個人主義だといわれ拝金主義だといわれる国々が、こうした有様である。むろん西洋といってもたくさん国があり、国民といっても何千万もいるのであるから、どこに何があるかは保証はできないが、西洋から利己主義や実利主義が流入したというのは、事実と相違している。

もし西洋からの影響というならば、資本主義の制度に伴ういわゆる資本主義的精神、すなわち利益のために利益を追求するという心理から、利己主義や実利主義が育てられたといえるかもしれないが、これとて徳川時代の町人根性がそのままに残ったともいえるので、武士階級の間には、武士道という道德律があったが、武士ならぬ町人には、特殊な道德律はなかった。そして自分の運命は全く武士階級の意のままに左右されたことから、卑怯・卑屈という悪徳も育てられ、利己主義、実利主義も芽生えて、それが資本主義的精神によって助長されたといえるだろう。しかしこうした歴史的な詮索は、今日の時勢に必要ではない。要するに「個」を捨て「全」に生きようとする軍人の精神、我々の先祖を支配した武士道の精神、それを我々のあらゆる生活に適用することが、最も切実に要求されているのである。

本来我々の生活には、「個」の主張の許されるべき部分と、「全」のために「個」を犠牲とすべき部分とがある。普段の平和な時節にも、兵役の義務、納税の義務、秩序を尊重する義務等々は、「全」のために「個」を犠牲とすべき部分であり、いかなる家屋に住んで、どんな食物を食べ、どんな本を読むか等々は、「個」の許されるべき部分である。従って我々の生活から「個」の部分を全部抹殺するのは、不当でもありまた不必要でもある。しかし非常緊急の時局に際しては、「全」のために「個」を犠牲とする部分が、極度に拡張されて、「個」の許されるべき部分が縮小するのは、当然過ぎるほど当然である。なぜならば、「全」のために尽くすことがなければ「全」が消滅するかもしれない、そして「全」なくして「個」の生活も残らないからである。今や祖国という「全」が重大な時期に遭遇して

いる時に、「個」に執着して「全」を顧みないならば、「全」は果たしてどうなるのか、「個」も果たしてどうなるのか。

我々の周囲でしばしば聞く声は、誰がこの戦争を始めたのかということである。私は十数年前から何度も書いたことであるが、事前には何をいおうとも、一旦政府が祖国の方向を決定した以上は、我々はこれに心から服従して、一心に祖国のために働かねばならない。いわゆる「一旦緩急あらば我々は財を捨て命を投げ打たねばならない」のである。今日は誰が戦争を始めたのかを詮索するほど、呑気で余裕のある時ではない。誰が戦争を始めようとも、始まったことは我々全体の責任である。もし戦争に反対であったならば、戦争を阻止する運動でも起こすべきであった。それをも為さないでいたことは、暗黙の間に自らも戦争の開始を承認したことになる。その後人の陰で不平をいうのは卑怯であり卑劣だと思う。誰が戦争を始めたにせよ、我々には共同の責任がある。ましてや始められた戦争は、段々と拡大して今日のような危機にまで来た時に、むだに過ぎ去ったことを頭に置くのは、愚でもあり浅はかでもある。我々は過去を顧みずして、ただ前方のみを眺めなくてはならない。国民の一部を咎めないで、国民一丸となって前進しなくてはならない。さもなければ我々の前には、ただ亡国の一途あるのみである。

また往々にして何人かの集会で耳にするのは、まるで他人事のように祖国の運命を論じたり、政府の政策を批判したりすることである。だが祖国は我々の祖国ではないか、祖国の運命は我々の祖国の運命ではないか。祖国を他人事のように考えるのは、どうした訳であろうか。我々はお互いに祖国を愛し祖国のために憂い、生命を賭して祖国を守る義務がある。また政府の政策にも議論の余地があろう、それを何らかの方法で政府に進言するのはよかろう、しかし人の陰で自国の政府を非難したところで何になるか。政府は誰の政府でもない、我々日本国民の政府なのである。政府を非難するのは、自らの手で自らの頭を打つと同じではなかるうか。私はこうした集会の際の言葉の中には、自らの責任を自覚しないで、責任を他

に転嫁して自らの責任を回避したつもりでいる心理があるのではないかと
 思う。それならば誠に許すべからざる無責任である。なるほど何人かの人
 びとが、共に国事を憂いて議論することはあり得る。その場合には、談ず
 ること自体が、憂国のあまりほとぼしり出るのであるから、一座に愛国の
 雰囲気のみなざるだろう、それならば各々の生活を緊張させる効果がある。
 しかしあの集会の席上でしばしば見受ける談話は、これと全く違い、国事
 に冷淡であり無関心なればこそ、ああした談話が漏れるので、聴くものの
 すべてが白々とした冷やかなものを感じて別れるに過ぎない。祖国を論じ
 たり政府を批判したりするその人は、自分の職場では微塵も指を染めさせ
 ないだけのことをしているかという⁴、決してそうではない。その人が
 批判するその言葉が、まさにその当人にこそ的確に該当すると思われるほ
 ど、当人の職場は無責任で投げやりである。いう必要のあることは、男ら
 しくいわれよ、しかし多くはただ黙々として、自己の職場を誠実に守られ
 よ。一億の国民が皆このようであれば、ここに祖国は初めて完全を得る。

政府は誰の政府でもない、我々日本の政府である。今日の我々にとって
 必要なことは、我々日本の政府を信頼して、これに一切を任せることであ
 る。もちろん政府当局は国民の信頼に背かないだけの覚悟を必要とするが、
 危急存亡の場合に政府に対する不満を漏らしたり、暗黙の間に反抗の態度
 を採ったりするほど危険なことはない。私は平常無事の場合でも、会議な
 どで自分の所信を忌憚なくいうことは必要であるが、一旦多数決によって
 会議体の意志が決定された後には、男らしく快活にこれに服従すべきだと思
 う。多数決で裁決が為された後でも、反対の態度を持続して、何やかや
 と決議の実行を邪魔するなどは、男らしくない卑怯な性格である。多数の
 決定には服従することが会議の規約であり、自分が多数派であった場合に
 は、多数派をあくまで押し通して置きながら、一旦自分が少数派になった
 時には、何とか理屈を付けて多数派に反抗するのは、会議の規約を無視す
 ることであり、それは規約に服従を誓った自分を、我自らが軽視すること
 ではないか。

今日は昔のように党派が対立して、会議で盛んに議論を闘わすことはなくなった。しかし会議において発揮される男らしさや自己尊重の心は、依然として必要とされている。政府当局は我々が頂いた政府当局である。その命令に快く服従していくことは、自己の信任した政府に対する自分の責任である。これから後の国情は、益々政府の独裁的傾向を強めるだろう。それは非常時局の場合には誠に当然である。いかなる民主主義的国家といえども、戦争中に独裁政治が敷かれぬ国はなかった。平穩無事の際に、衆議を重んじ世論に従って決する理由は、すなわち非常緊急の場合に独裁的傾向となる理由である。我々の政府を信頼しその命令に服することにならないと、将来どんな一大事が起こらないとも限らないと思う。

我々が亡国とならないために、一方の血路を切り開こうとすれば、我々の日常の衣食住の生活は、今とは比べものにならないほど窮乏してくるであろう。また農工商等の実業に従事しているものは、段々自由が利かなくなつて、破綻が現れてこないとも限らない。しかし前大戦中に米国はあれほど物資の豊富な国でありながら、パンやコーヒーや砂糖を極端に制限していた。それから見ると、今までの日本の統制などは、物の数にも足りないほどである。もし我々が窮乏に陥つた場合には戦線にいる将校や兵士の生活を想い起こそう。何日も何日も米もなく水もない日の続くことがあり、寝るのに屋根もなく蒲団も夜具もないことが多い。傷ついて血がほとぼしりながら、軍医も看護師も待てども来ないのが普通であると聞く。これに比べれば、寝る家屋があり食う物もある。窮乏に耐え苦難を忍んで、戦場の武士の魂を我々の日常生活に生かされよ。

我々の前に考えられる危険な場合とは、我々の日常生活が極度に窮乏した時か、敵の飛行機から空爆された時か、あるいは我が軍の不利なる情報 came 場合かであろう。こうした時にとすれば、狼狽があり混乱がある。これに乗じて流言が飛び飛語が舞う。これに敵国の陰謀も加わる。だが一人動けば二人動き、二人動けば三人動き、やがて百人が動き千人が動き万人が動くことになる。各々が揺るぎなく立っていたい。そして祖国の旗の下にただ一人のように固まっていたい。

前大戦の歴史を読むと、一方の国が非常に疲弊して降伏を申し出ようとした時、必ず他方の国も忍耐の最大限にまで来ていたことが分かる。勝敗は最後の五分間で決定するというが、これからの戦争は、戦線であろうと銃後であろうと、要するに意志の戦いであり、信念の戦いである。これからの日本にいかなる苦難が襲い来たろうとも、迷うところなく怯むところなく、あくまで執拗に、最後まで歯を食いしばって、一筋の道を真っ直ぐに進まれよ。祖国の運命を疑う念がきざした時は、神の恩寵、天の恵み我にありと信じて、敵のように屹然として立たられよ⁵。

我々はドイツ及びイタリヤと軍事同盟を結んでいる。昨年（昭和15年）9月にこの同盟が成立するまでは、国内にも多少の異見があったであろう。しかし我々はこの二国と手を握った、そして彼を助け彼が我を助けることを誓った。かくて我々は道徳的義務を負ったのである。私はこの事実を重要に考えなければならないと思う。

そもそも同盟を結ぶのは、利害が共通だからであり、当然日本も利するところあればこそ、二国に手を差し伸べたのである。しかしすでに同盟を結んだ以上は、我々は自分の利害に動かされて、道徳的義務に背いてはならない。仮に同盟国を働かせて、自らは濡れ手で粟をつかもうとしたり、他人の弱みにつけ込んでこれと手を切ろうとしたりすることでもあるならば、それこそ日本は利己的であり実利的だと笑われるだろう。国際間の道義は地を掃ったともいえるが⁶、それでも一旦手を握って運命を誓った同志に、信義に反する行為を犯したならば、日本の信用は永久に地に落ちるに違いない。祖国の利害は一時的であろうとも、祖国の生命は永遠無窮である。我々は祖国の名誉に傷を付けたくはない。いな信義を裏切るのは、我々国民を道徳的に墮落させることである。

我々の祖先は戦場で自らを犠牲として、敵さえも助けたことがある。まして自己の利害のために、信義を裏切った武士を、風上にも置けない腐れ者としてつまはじきにした。市井の無頼の侠客でさえも⁷、仁義を守った同志のためには、進んで自らを危険にさらした。日本は昨年9月この重大

な道義に、自らを置いたことを、我々国民は一刻も忘れてはならないのである。

我々は同盟国への信義に身を束縛せねばならないが、我々はむだに他国に依頼したりもたれかかったりしてはならないと思う。人間は結局ただ独りなのだ。それは個人についても国家についても同じことである。自らを信じ自らに頼るよりほかない我々は、あくまでも自主的で自律的で独立独立歩の覚悟が必要である。もちろん同盟国との親善は望ましい、しかし自ら気が付かない間に、同盟国を阿諛追従したり、媚態を呈したりすれば⁸、親善が増すよりも、かえって相手方の軽視・蔑視を受けるかもしれない。他国に道義的であろうとする国家には、自然に自己の威信を傷つけないだけの矜持の心がある。

我々は台湾で異民族に接触し、次いで朝鮮でさらに満洲で、異民族との交流を持った。いわゆる東亜共栄圏が確立した後は、さらに一層多くの異民族と接触しなければならなくなるであろう。その場合、我々がいかなる心の用意を必要とするかは、将来の教育上の大問題であろう。戦争後のことをいわないにしても、現在でも我々の同胞は中国において仏印において、異民族と深刻な接触を経験している。それは戦闘という形式においてか、あるいは通商という形式においてか、いずれにしても軍の威力の下に接触している。戦争は殺し合いであるから、戦争は勝っても負けても、何らかの復讐を受けるものと覚悟せねばならないが、それでも接触の仕方いかんによっては、敵からも尊敬されることがないとはいえない。

私は日本で生まれ日本で育ったある英国人と話したことがある。その人は文字通りの日本通であり日本びいきであった。彼がある年母国に帰って、知人とロンドンの街を散策している間に、急に雨が降り出した。その時、彼はどこかで傘を借りようといったそうである。知人は笑って、知らない他人から傘が借りられるものかといった。彼はロンドンの街を歩きながら、日本にいるような気がしていた、だから赤の他人からでも傘は借りられるものだと思ったのである。彼はその時ほど英国が呪わしく日本が懐かしく思われたことはなかったといった。我々の日本には、異国人をもこう思わ

せるものがあつたのである。

私は最近、関ヶ原の戦記物を読んだが、大谷吉継が味方敗北と知って、家臣に命じて介錯させ、難病でただれた首を敵の手に渡らぬようひそかに埋めさせることとした⁹。そこへ徳川方の武士が来て、家臣に槍を突きつけた。家臣は武士として頼むから、このありかを秘密にしてくれといい、敵が承知するのを聞いて、喜んで敵の槍にかかって倒れた。徳川方で吉継の首を探しているのに、その武士は恩賞を犠牲にしても、頑としてありかを告げなかった。家康は頼まれた信義に背かない武士の心中を誉めたということである。武士として敵を信頼する吉継の臣、敵の信頼を裏切るまいとしてあくまで頑張ったその武士、武士はかくありたきものと賞賛した徳川家康、これが我々の武士道であつた。こうした逸話は、日本の歴史のなかに無数に見出されるだろう。

あの関ヶ原の逸話は、何を我々に語るであろうか。敵味方と別れて殺し合いながら、頼み頼まれるのは、敵味方の対立を越えた道義の世界で、お互いが結ばれているからである。彼らは現実に闘いながら、別の世界では互いに同志であつた。恩賞を棒に振っても約束に背くまいとするものや、敵将の首を求めながら、約束に忠実であることを賛美し得るものは、利害を超越した道義の上に立っていた。一言にしていえば、武士は武士として闘いながら武士のみでなく人間であつた、そして相互の人間を尊敬した。さらに別の言い方でいい換えれば、ここに人格の尊重があつた。武士道は大和民族の中に、そして武士階級の間にものみ守られたであろう。しかしあれほど高貴な精神が、大和民族の中の一階級の間にものみ、限定されねばならぬ理由はない。我々は新しい精神を発明する必要はない。問題は竿頭一步を進めて¹⁰、武士道を異民族の間にも徹底させることにある。

異民族すなわち血液も言語も風俗も文化も歴史も異なる民族を、いかに処遇するかは容易な問題ではなからう。机上の理論を直ちに適用できるほど、簡単な事柄でないことは分かる。私も日中戦争の起こった年の暮れに、中国北部に短い旅行を試みて、中国民族の複雑さに驚いたことがあつた¹¹。異民族にいかに対処するかは、日本の将来の大きな課題であり、東

亜共栄圏が豊かに結実するかどうかは、主としてここに関係して来る。

だがいかに民族が異なろうとも、結局において人間である。闘いながら殺し合いながら、対立を越えた感情が皆無とはいえない。ましてや平和の通商の場合には、一層人間としての同類意識がないとはいわれまい。威厳と寛容はあわせ行われねばならないが、この二つは本来同一のものの裏と表である。権力を楯として圧迫した異民族は、権力の退いた後は再び起ち上がるだろう。自らが威武に屈せず富貴に淫しない偉丈夫は、威武をもって富貴をもって、他人を屈せしめようとはしない¹²。日本国民が武士道を異民族にまで適用し得るかどうか、これが日本の百年の大計であり、また東亜百年の大計である¹³。

人がもし大和の国一円 of 古寺を巡礼するならば、そこにある建築と仏像と絵画に、驚異の眼を見張らずにはいられまい。法隆寺、薬師寺、東大寺、唐招提寺、新薬師寺、法華寺などに見られる簡素と荘重、威厳と慈愛は、我々に1300年以前の祖国に対して、肅然として襟を正させるものがある。すでに儒教を入れ仏教を入れ、さらに仏教美術を入れることについては、保守反動の反対があったにもかかわらず、これを排して思い切り唐の文化を吸収した当時の大胆さは賛美の限りである。あの芸術を眺めて、我々の祖先の美的観照の水準がしのばれて奥ゆかしい。西洋が中世の暗黒時代にあった時、日本はあれだけの芸術を生むことができた。もちろん実際に創作したものは、帰化人またはその子孫であったろう。しかし鑑賞者なくして創作はあり得ない。西洋芸術の黄金時代といわれるギリシャでさえ、創作者は奴隷に等しい工匠であったという。祖国日本への愛と敬を育もうと思うならば、大和一円 of 古寺を巡歴するのに匹敵するものはない。我々の自信を強めるものがあの地方にはある。

鎌倉時代に我々は法然、親鸞、道元、日蓮の四人の仏教改革者を持った¹⁴。彼らは北嶺比叡山に籠もって¹⁵、夜を日についで万巻の経文を読破し¹⁶、骨を刻み肉を削ぐ難行苦行をあえてした。北嶺こそ当時の学問の研究所であり、また修行の道場であった。しかし彼らは旧仏教に別れて山を下り、新興仏教の旗を揚げた。その後における彼らの活動が、いかにたくましく

も凄まじくあったことか。とりわけ日蓮においては、宗教的情熱は憂国の義憤へと結ばれた。彼が「立正安国論」を掲げて、鎌倉幕府の迫害に屈せず、あくまでその所信を貫いたのは、単に日本の宗教史上の偉績であったのみではない、我々の祖先の人格的強さを物語るものであろう。だが強かったのは、決してひとり日蓮のみではなかった。あの優しい慈愛と連想される親鸞でさえ、肉食妻帯を唱えては、南都北嶺の嫉視敵対と戦った¹⁷、そしてついに勝ち通した。彼らは何れも武士ならぬ武士であった。温和にして妥協性に富むといわれる日本国民の中に、あれだけの宗教的情熱とあのとくましい意志力が潜められている。鎌倉時代の新仏教の使徒こそは、我々の自信を強めるものの一つである。

明治維新の直前に、我々の祖国は独立を失うかも知れない脅威の下に立った。この時、祖国の進路を何れへ向けるかは、当時の指導者の頭を悩ました問題であったに違いない。だが反感や反発をもって西洋に向かおうとはしなかった。己の乏しさを見抜いて、謙虚に西洋の文化を入れて、西洋に追い付こうとした。維新前夜から明治20年まで、いかに日本は熱狂的に西洋の科学と社会思想と哲学を吸収したであろう。東洋のある国は排外排斥の方針を採って、西洋の文化を入れまいとした。またある国は西洋文化に圧倒されて、自国の文化を喪失した。しかし我々の日本はその何れをも採らなかった。門戸を開いて西洋文化を受容すると共に、自国の特殊性を失わないだけの伝統に固執した。あの謙虚さは自信があればこそ持てたので、自信と謙虚は、これも同一のものの裏と表である。

自国の文化に自信を持って、西洋の文化を受け容れたのであるから、西洋文化の消化が一応の程度まで来ると、やがて日本固有の文化が、新装を凝らして逆襲に転じた。明治20年からはじまる文化運動は、帝国憲法と教育勅語の渙発をはじめとして¹⁸、儒教と仏教の復活、理想主義哲学の台頭、日本古美術の復興、国民主義・国家主義の旗揚げに至るまで、すべて日本固有の文化の逆襲でないものはない。しかもこの逆襲は日本在来の姿のままではなく、一応西洋文化を消化して、その扮装を帯びての復活である。いかに熱狂的に西欧文化を受け容れても、我々は己の地盤を失うことはな

かった。明治思想史を研究して、前半期の西欧文化に対する謙虚さと、後半期の日本文化への自信を、つぶさに跡付けるものは、我々日本国民の驚嘆すべき受容力と、曲げることのできない強靱な伝統力に、敬意を表せざるを得ないであろう。ここにも我々の自信を強めるものの一つがある。

我々の祖国は決して単に外国の侵略を受けなかったという名誉の歴史を持つだけではない。我々の自信を強める数多くの事実を持つ。この事実を背後に背負って我々は前進を続けるべきである。

すべての国家は政治の中心を有する、そして政治の中心、これを元首という。元首は血統をたどって歴代相継ぐこともあり、あるいは一定の任期を定めて人民が選挙することもある。前者は君主国であり後者は民主国である。日本の元首は、天皇でいらっしゃる。だが天皇が万世一系の皇統を継承され、皇統の連綿たること2600年の永きにわたったことのみが日本の天皇が万国に優越するゆえんではない。実に天皇は日本において単に主権者として権威の主体として政治の中心に立たれるのみならず、我々臣民の道義の中心として臣民に臨んで下さるのである。外国の君主は臣民と利害が対立し、君主に圧迫・搾取・虐政の歴史があった。しかし日本において天皇は決して臣民と対立されたことなく、圧迫とか虐政とかの事実は、日本の歴史の中には見出されない。天皇の聖慮は常に臣民の人格の成長の上にはいらして下さった¹⁹。

明治天皇が明治22年に御発布下さった憲法の勅語には「朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ万世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕力親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕力祖宗ノ恵撫慈養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ其ノ康福ヲ増進シ其ノ懿徳良能ヲ發達セシMEMコトヲ願ヒ」²⁰と仰せられた。「懿徳良能ヲ發達セシム」とは、すなわち人格の成長のことであり、「康福ヲ増進ス」とは、人格の成長のための条件たる康福の増進を意味されるものと拝察される。

民の寵が賑わうのを喜んで下さった仁徳天皇が臣民の経済的条件を御軫念下さったように²¹、歴代の天皇は臣民を民草と仰った。草が伸びるかのように、臣民の成長を叡慮されたのである²²。しかもこの臣民、かの臣民

という特定の臣民ではない。数千万の臣民が一樣に、天皇の聖慮の対象であった。これに対して臣民たるもの、誰が感謝し感激しないものがあるのか。ましてや御一代の天皇がこのようにいらしただけではなく、歴史を通じ万世にわたって、常にそうであった。かくして、臣民の感情は凝集して、崇敬の感情に化した。天皇は臣民の成長をお図り下さり、臣民は天皇に対して忠ならんことを願う。かくて日本において天皇は元首でいらっしゃるのみならず、国民の自然に流路する感情の中枢にお立ちになり、しかも臣民の感情は高められて、崇敬の感情となる。君臣のこのような関係、これが我が国体の精華という。

祖国という言葉を書く時に、人はともすれば抽象のもどかしさを感じるであろう。だが我々の祖国は天皇に象徴される。日本の歴史を通じて、祖国の危難が迫った時に、国民の眼は常に京都の朝廷を仰視した。我々がこれからの荆棘の道を歩むにつれて²³、我々の眼は何度か天皇を仰視することがあろう。そしてそこに国民の結成が強められ、国民の前進が早められるであろう。

五 国内分裂を警戒せよ

前項の一節で、日本国民の前進の途上に警戒すべき場合が三つあると書いたが、それよりもさらに一層警戒すべきものがある、それは左翼の煽動計画による国内の分裂である。人はあるいは日本国民にはこのようなことは杞憂だということかもしれない、またあるいは我が国にはすでに左翼は根絶されたということかもしれない。しかしそれはあまりに楽観的過ぎる。我々はまだ雨の降らざるうちに窓を繕い、天下の憂いに先立って憂えなければならぬ²⁴。

ここにいう左翼とはマルクス主義者をいい、マルクス主義者であれば、それが共産主義者であろうと、社会民主主義者であろうと、何れをも包含するのである。私は前に小異を捨てて大同につくといい、和衷協同が大切だといったが、その際根本において相容れない限り、と制限を付けた。今日の危急存亡の時期に、国内は一致結束して協力せねばならないが、不幸

にしてマルクス主義者はその国体観において、その国家観において、その戦争観において、その法律秩序に対する見解において、さらにその道徳に対する立場において、根本的に相容れないものである。今でこそ彼らは口を閉ざして沈黙を守ろうとも、それは主義・主張を捨てたのではなくて、時が不利だからである。やがて好機が来れば必ず猛然として起つに違いない。猛然として起つほどマルクス主義者の数は多くないと思うならば、それは非常な誤りである。その数はいかに少なからうとも、国民が迷い惑って浮き足立つ時に、その煽動が案外に奏功するかもしれないし、今でも洞ヶ峠に立って日和見をしているものは²⁵、決して少なくないからである。

ヒトラーは1918年のドイツの崩壊を回顧して、「我々が戦線で祖国のために闘っている時に、マルクス主義者は合口をもって我々を背後より刺した」という。そこで私は前大戦の終局におけるドイツのマルクス主義者の運動について語らなければならない。大戦前に社会民主党は議会で議席110を持ち、ドイツ最大の政党であった²⁶。もちろん小党分立のドイツ議会であるから、110の議席は、全議席の四分の一に過ぎないが、それでも最大の政党であることができた。社会民主党は戦争以前には色々な大会で、戦争反対の決議を發表していた。1914年8月4日カイザーはベルリン王宮のバルコニーから²⁷、民衆に戦争鼓舞の演説を為し、最後に「朕はドイツの政党の違いを知らない、朕はただドイツ人であるのを知るのみ」と結んだ。従来は社会民主党に対して反対してきたが、今日では社会民主党に対して差別的待遇しないとの意味であって、戦争に対するマルクス主義者の援助を求めたのである。社会民主党は従来大会で戦争反対の決議を為したにもかかわらず、いよいよ戦争が勃発するや、大多数は戦争に賛成し、14名の反対者はあったが、党議をもって戦争賛成と決定し、8月4日の議会での軍事予算の協賛には、14名の退場者を除き、党は満場一致をもって予算に賛成投票をした。ここで注意すべきことは、従来戦争反対を唱えたものが「城内平和」を唱えて賛成に変化するほど、始終言説と実行が矛盾し豹変していたこと、賛成者の中には戦争中こそ革命の好機なるがゆえに戦争に賛成したのもあったこと、14名の反対者はその後において漸次増

加する傾向があったこと等々である。

戦争最中に反対者の数は年ごとに増し、ついに1917年の4月には「独立社会民主党」を組織するまでになった²⁸。しかし各方面の戦勝が華々しき間は、民衆は動揺の色なく、マルクス主義者も何かをやりはじめる余地がなかったが²⁹、1918年9月西部戦線が後退するや、マルクス主義者の活動は現れ出した。10月5日バーデン公マクシミリアンがウィルソンに休戦提議を為さざるを得なかったのは、こうした国内の状況を見たからである。10月30日キールの軍港で暴動が起こり、次いで11月7日ミュンヘンに蔓延して共和国が成立し³⁰、同9日ベルリンで大きなストライキが起こり、社会民主党が政権を執るに至った。休戦協定が結ばれたのは、11月11日であったが、ドイツは条約の峻厳さなどを考える余裕さえなかった。国内は分裂して思いを祖国に致すことができなかつたからである。ヒトラーが背後から合口をもって我々を刺したマルクス主義者と憤つたのは、こうした事情をいうのである。

マルクス主義者は政権を握つたものの、それ自身が分裂不統一であつたから、敗北後のドイツを安定させることはできなかつた。マルクス主義者は多数派の社会民主党と独立社会民主党と共産党の三派に分かれ、1919年1月5日のベルリンの暴動で³¹、後の二つの党派は共同したが、多数派社会民主党のノスケの辣腕により鎮定され³²、多数派の勢力は確定したものの、ドイツは以前として安定することはできなかつた。1919年6月ドイツがヴェルサイユ条約の桎梏を受けねばならなかつたのは、ドイツに一致結束が欠けていて、外に対抗する力のないことが、連合国に見透かされていたからである。ドイツはウィルソンの十四カ条で夢を描いて幻滅の悲哀を経験したが、ドイツに夢にすがらせたのは、マルクス主義者による国内の分裂混乱であつた。

だがドイツの分裂は大戦直後のみにとどまらなかつた。議会には依然小政党が対立して中心がなく、多数党の社会民主党は共産党と相争い、紛争と政権の移動が絶えず繰り返され、1919年から1933年に至る14年間に、内閣の更迭は20回に及び、ドイツが敗北の後を受けて、いち早く再建に向か

わねばならなかった際に、これだけの無駄な紛糾をあえて続けていた。もしドイツに生きる希望があれば、この状況を放任することはできない。ヒトラーの「国家社会主義運動」は、この心理に乗じて、燎原の火のような勢いをもってドイツ全土に蔓延した。1919年ミュンヘンに「ドイツ労働者党」なる団体があった。党員はわずか6名に過ぎず、これに第7番目の党員として加入したのがアドルフ・ヒトラーであった。翌年党名を「国家社会主義ドイツ労働者党」と改め³³、以来1933年の総選挙に投票数1700万を獲得するまで、わずか14年間にわたり驚嘆すべき党勢の拡張を為し得たことは、世界政党史上の奇跡であった。ヒトラーを成功させたのは、ドイツが復興のために指導者を求めたことによるが、さらにその原因を追究すれば、マルクス主義者によるドイツの分裂が、国民の忍耐の飽和状態に達していたからである。春秋の筆法を用いれば³⁴、マルクス主義者はヒトラーを成功させたことになる。そしてヒトラーの弾圧の下に、彼らは自己の墓穴を掘ったのである。彼らの運命がどうあろうとも、それは我々の関わるところではない。しかし我々が看過してならないことは、マルクス主義者がドイツを崩壊させたこと、ドイツを苛酷な条件の下に立たせたこと、14年間無用の浪費と混乱を招いたことである。殷鑑遠からずドイツにある³⁵。我々日本国民は、ドイツの轍を踏んではならない。

人はマルクス主義の名を聞く時に、直ちに共産党のみを連想するかもしれない。そしてアジトを襲われた時に、ピストルを乱射する暴力団体を思い浮かべるかもしれない。だが、これだけがマルクス主義者ではない。共産主義者のほかに社会民主主義者がいる。後のものものは一応は共産主義者のようにいわゆる実践を企てないかもしれない。しかし双方はその国体観を同じくし、その国家観を同じくし、戦争観を同じくし、法律秩序に対する立場、道徳の基礎に関する立場を同じくする。ただ二つが異なるのは、差し当たり当面の社会に働きかける戦術のみである。従って社会民衆が迷い惑う時が来れば、社会民主主義者の戦術は変化して、共産主義者と同一行動を採ることはあり得るし、恐らくはその場合は多いであろう。なぜならば彼らが共通に持つ思想体系の中には、法律秩序に対する尊重もなければ

ば、自己を抑止する道徳的義務の原理もないからである。社会民主主義者は状況のいかんによっては、いつでも共産主義者に変化し得るマルクス主義者である。今後の日本において特に注意を怠ってはならないのは、マルクス主義者の中の社会民主主義者である。

我々は往々にしてマルクス主義者の間に、転向が行われたと聞く。しかしマルクス主義者のように世界観・人生観に基礎を置く思想体系から、すぐさま根本的に正反対の思想体系に飛躍し得るとは考えられない。もし転向したというならば、これらの基礎は依然として元のままとして、ただ国体に対する見解を改めたとか、日本の特殊性を認識したとか、戦術を訂正したとかいうことであろう。しかしマルクスの世界観・人生観をそのままにしておいて、その基礎の上に立つ諸点を訂正したとして、それが何になるだろうか。やがて社会状況が変化すれば、再び元に戻るのは、火を見るよりも明らかである。なぜならば、その転向した諸点と、元のままにおいた基礎とが本来矛盾しているのであるから、矛盾を犯し続けられない限りは、本来の姿に戻って再転向するのが当然だからである。これを真実の転向と解釈するのは、あまりに人が好過ぎるし転向だと主張するマルクス主義者は、あまりに狡猾に過ぎると思う。

だが私がここで忠言したいのは、転向の道徳性である。マルクス主義者はあるいは実践運動を企てて、国家の法律秩序に挑戦した。あるいは官・私立の大学の教壇から学生に講義し、あるいは少人数の集会で青年をマルクス主義へと誘引した。さらにあるいは著述によってマルクス主義を宣伝し、あるいは総合雑誌にマルクス主義の評論を書いたのである。彼らは社会民衆を啓蒙し、他人の子を教育した。武人が祖国を守るために戦場で倒れるように、教育者は自己の主義・主張に対して言葉の責任を負わなければならない。従来主義・主張が誤謬であったというならば、男らしく清算するのはよい、しかし公然と社会公衆に陳謝しなければならないはずである。私はマルクス主義者のいわゆる転向書なるものを瞥見する機会を持ったが、そこに現れている転向理由なるものは、ほとんど採るに足るものでなく、常識あるものならば、初めから何びとも気付いていたことを、

今さらに列挙しているに過ぎないのである。当然に判断し得るであろうことを判断し得ないで、マルクス主義を教壇と評論雑誌から教育して置きながら、すぐさまかつての主義・主張が誤謬であったという。そもそもどんな面目で世人・学生にまみえるのか。私は転向者の教育者としての良心を疑わざるを得ない、そしてこれを怪しまない社会公衆の良心を疑わざるを得ないのである。

そればかりではない、社会民主主義者が教壇や雑誌から、マルクス主義の教育に執心していた時に、彼らは学界・思想界の寵児であり人気役者であった。マルクスを引用しないものは、学者でも思想家でもなく、ただ反動とか御用学者とかの汚名を浴びて葬られたのである。共産党の実践運動は当然に法律の制裁を受ける覚悟を必要とした。少なくとも共産主義者には自己の主張を実践するために、自己の運命を犠牲とする男らしさがあった。ところがマルクスの社会民主主義者は学界・思想界の大勢を背景として、犠牲を賭することなしに、マルクスの教育を為し得たのである。当時においてマルクス主義に反対するには、大勢に反抗する勇気を要したが、マルクスを賛美することは、単に勇気を必要としないのみか、大勢に順応する気楽さがあった。こうした状況の下に彼らがマルクス主義者となったことについては、その動機の純粋性が疑われるのであるが、その試練は大勢が不利に変化した時の彼らの進退にある。ところが昭和5、6年から10年にわたって、日本の学界・思想界が徐々に変化するや、彼らはたちまち転向し、あるいは口を拭って、昨今は新体制を謳歌している³⁶。ここに我々が理解し得たことは、彼らがマルクス主義を信奉したことの軽率さと、これを弊履のように捨てるはしたなさである³⁷。信奉したことが軽率であったから、これを捨てることも容易であったのかもしれない。しかし許し難いのは、彼らの学者としての軽率さと、教育者としての無節操さである。こうした人々からこれ以後、社会は何を聴こうというのであろうか。もし日本の社会に鋭き良心があるならば、社会はこれに対して厳然たる批判を持たなければならない。

しかしこれだけならば、問題は学界、思想界、教育界のことにとどま

り、あえてマルクス主義者に限らず、社会の批判を受けるべきものは他にもあろう。しかしこれからの日本にとってより重要なことは、マルクス主義者が今でも国民の一部に残っている事実である。往年のマルクス主義者は、あるいは転向を誓い、あるいは単に口をつぐんで、今や右翼の陣営に潜入していることが、まず注意されねばならない。およそ今日ほど右翼と左翼の区別が明白さを欠くことはない。木下半治氏の『日本国家主義運動史』を読むならば、今日の右翼のスローガンが、左翼と類似していることに驚くだろう³⁸。ただ国体の一点を除けば、左翼は右翼に紛れることができるのである。あるいは民間の調査所または研究所の中に入り、あるいは今もなお官・私立の大学の教壇で教鞭を執るか、または著書・論文を発表している。もちろん今日の時勢を慮って、露骨にマルクス主義を教育してはいない。しかしマルクス主義の世界観、人生観、歴史観を捨てないで、この基礎の上に立って、社会現象の分析を企てるか、歴史の研究をするか、あるいは全く顧みて他を語っているのである³⁹。しかし講義を聴くものも、著書を読むものも、それがマルクス主義的であることを知り、いわずして隠されているところにマルクス主義を探って、ひそかに満足しているのである。端的にマルクス主義を説かないで、しかも隠約の間にマルクス主義を匂わせる著書が、今でも盛んに読まれているのである⁴⁰。

さらに進んで考慮せねばならないのは、マルクス主義の及ぼした影響である。マルクス主義のように、世界観・人生観までを包含する思想体系は、これと厳然として対立する世界観・人生観を信奉しない限りは、多かれ少なかれそれからの影響を受けざるを得ない。そうであればこそ私は、十数年来マルクス主義を克服するただ一つの路は、マルクス主義に対立する思想体系を樹立することだと、忠言し続けたのである。だがその後に至るまで、何が樹立されたであろうか。対立する思想体系を信奉するだけが、真にマルクス主義者でないといえる。そうでない限りは、マルクス主義はどこかに潜んで、やがて突然として現れてくるのである。今日の日本の二十代の末期から、三十代の青年・中年の人々を通じて、多少なりともマルクス主義の影響を受けていないものはいない。とりわけ都会におけるイ

ンテリ層においてそうである。今日のインテリ階級が時局に冷淡だとの非難はしばしば耳にすることであるが、それはインテリの中にマルクス主義が潜在しているからである。

マルクス主義の及ぼした影響の中で、最も注意すべき点は、それが青年とりわけインテリ層の性格に及ぼした弊害である。マルクス主義の哲学が唯物論であるために、その影響を受けたものは、社会が必然によって動く、人間の意志はこれをいかんともすることができないと見る。ここにおいて、あたかも自分のみは社会の埒外に立つかのように見なして、社会の進行を拱手傍観しようとする⁴¹。自らが率先して身を挺して、社会の進行を早めまたは止めようとする気迫も情熱もない。のみならず、他人が体当たりで真剣に行動しているのを見て、冷やかに局外にあって嘲り笑う。道徳はその時の社会関係によって変化すると考えるから、道徳による厳粛なる義務の自覚がない、かくして誠実を欠き真摯に乏しく、虚偽の言を弄することを意に介しない。一定の道徳の規準を持たないから、常に手段を目的のために正当化しようとする。およそこれらの性格は明らかに道徳的退廃でなくて何であろうか。道徳的退廃とは詐欺とか窃盗とか収賄とか放蕩とかを意味するばかりではない。これらの悪徳は道徳を承認した上での悪徳であるが、前に列挙したような性格は、およそ道徳的生活の根本を動揺させる種類のものであって、あれこれの悪徳の比ではない。これらの性格は日常の平穩無事の時代でも、もちろん好ましくないが、この非常緊急の危機において、最も好ましくからざる性格である。

だが人間である限り、こうした道徳的退廃を全身的に甘んじられるはずがない、とりわけまた純真さを失わない青年時代においてはなおさらである。とはいっても進んでこれを清算するだけの勇氣もなく決断もないから、依然として元の木阿弥である。そこで一人の人格の中に、およそ異なる二つの性格が対立し、いずれが勝つか定まらない分裂不統一の性格が生じる。これが性格的破綻者である。

私が前項の国民への警告として書いたことを、ここで思い返してみると、祖国の運命を他人事のように傍観していること、自分の政府の政策の陰口

をいっていること等々、これらのすべてがここに挙げたマルクス主義からの影響と、符節を合わせたように一致するのが分ころう⁴²。国内に左翼が残存していることは、すでに今日の祖国にとって、由々しき一大事であるが、マルクス主義からの影響を考えると、今日の危機に最も適応しないものであり、今日の危機に有害であることが分かる。

単に今日に有害であるのみではない。未来にあるいは起こるかもしれない祖国の混乱期に、マルクス主義者は背後から合口をもって同胞を刺すかもしれない。今日の日和見連中はその時、マルクス主義の好機到来とばかりに一斉に洞ヶ峠を下るかもしれない。私が祖国の未来のために憂慮に耐えないのは、この一点である。和衷協同はもちろん望ましい、だがこの点については断固たる批判を持たねばならない。

政府当局はこうした場合を予想して、用意に手落ちのないことを信ずるが、政府当局のみならず、国民もまた用意を怠ってはなるまい。マルクス主義者の数は全国民に比べれば、いうに足らない九牛の一毛に過ぎない⁴³。だが問題は数ではなくて質である。国民の大部分が固く己を持して動かなければ、マルクス主義者のうごめく余地はない。いかなる事態が起ころうとも、国民は一致結束されよ、そして左翼の煽動に乗せられてはならない。

マルクス主義者の数は少なく、国民の大多数はもちろんこれに反対だとすれば、問題は少しも残らないはずであるにもかかわらず、過去においても現在においても、必ずしもそうではないのはなぜであろうか。それは一言にしていえば、マルクス主義反対者の中に、これを圧倒するほどの気迫と情熱がないからである。もしも一般の学者・思想家に、一途な気迫と情熱が余りあったならば、かつてにおいてマルクス主義に、あれほど跳梁跋扈はさせなかったであろう。それなのに少数の例外を除いては、マルクス主義旺盛の時代に、我が国の学界・思想界は誠に寂として声なかったではないか⁴⁴。しかし私はあえて過去をとやかくいおうというのではない。私のいわんとするのは、かつてそうであったように、現在の祖国の危機において、依然として学会・思想界が寂として声上がらないという一事であ

る。私がこういったとしても、もちろん自然科学者や社会科学者が、その専門的な技術をもって、祖国に力を尽くしていることを軽視しようというのではない。だが専門的な技術や知識は、いかに必要であろうとも、それだけが祖国に対する奉公のすべてではない。とりわけ身を学問と思想と教育に奉ずるものは、このほかに奉公の道がなければならないはずである。いうまでもなく、学者が物知りと区別されるのは、物知りの知識が分量が多いだけで散漫で不統一であるのに反し、学者の知識が一つの中心によって体系づけられ組織されていることである。従って、学者たる限り、社会学者はもちろん自然科学者といえども、単に狭隘な専門的知識を持つだけでなしに、その知識がより広範にして、しかも統一と体系がなければならない。とりわけ社会生活について、祖国に対する立場について、一定の確固たる見解がなければならない訳であり、思想家・教育家に至っては、むしろこれをその専門とするものである。それならば学者、思想家、教育家が、祖国の現在の危急存亡の時に、その祖国に対する一念やみがたく、その誠意を傾けて国民を鼓舞し鞭撻しなければならない義務がある。政府が政治的に国民を指導するならば、これらの人々は道徳的に精神的に国民を指導すべきである。それなのにこの義務を自覚して、この任務に奮起するものを、何人数えることができるであろうか。

私に率直にいわせれば、この数年来の学界・思想界は、思想統制の声におびえて、死のような沈滞に陥っているのである。ひたすらその思うところは、筆禍・舌禍を免れることのみである。人影で物をいい小声でささやき、その言葉が他に漏れるのを恐れる。怯懦・臆病は学界・思想界を支配し、卑怯・卑屈は学者・思想家を風靡している。その思念において祖国に不忠なのではなかろう、ただ沈黙と無為をもって一身を保つのに急なのである。これをもって青年・学生を教えようとしても、教えられるものの冷笑を買うのは当然である。学問の権威と教育の威信は地に塗れた⁴⁵。いにしえの学者はその所信のために、はりつけの刑にさらされても火あぶりの刑に処せられても、少しも退くことなく、少しもためらうことはなかった。一方で教学刷新の声があつて⁴⁶、他方で教学衰退の事実があることが、今

日のように甚だしかつたことはない。これはそもそも何に起因するのであろうか。その罪はもちろん他に帰すべきものもあろう、だが大半の責任は学者・思想家自体が負わなければならないまい。学問の意義と任務、学者の人格の成長が、全く等閑に付せられていたからである。いわゆる教学の刷新は、ここにこそ核心を置かねばならなかった。

今にして懐かしくしのばれるのは、19世紀初期のプロシア復興当時の学者・思想家の気概である。1807年プロシアがナポレオンの馬蹄に蹂躪されて、ティルジット条約を押し付けられた後に⁴⁷、いかに祖国復興のために学者・思想家が奮起したであろうか。シュタイン、ハルデンベルク等の政治家を助けて⁴⁸、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、ギリシャの人文主義を国民教育の骨子として、国王の譲位を迫ってまで教育制度の改革を遂行した⁴⁹。とりわけフィヒテがベルリンの聴衆を前に、「ドイツ国民に告ぐ」の講演を為した時は、廊下にナポレオンの兵士の靴音が聞こえていた⁵⁰。彼は敵軍の銃剣の下に立ちながら、ドイツの状況を憤慨し、ドイツの復興を絶叫したのである。ドイツの滅亡は、国民の道徳的退廃が原因だといひ、国民の道徳的再生がドイツ復興の道であるといつた。ライプチヒの戦いでナポレオンを破ったドイツの青年は⁵¹、戦場のかがり火の傍でフィヒテの講演を想起したであろう。単にナポレオンをドイツから駆逐したばかりではない、フィヒテやフンボルトはドイツ永遠の基礎を据えた。1871年の普仏戦争の時も⁵²、現在のドイツの復興でも、その源は19世紀初期の学者・思想家の気迫と情熱にある⁵³。

退いて思いを祖国百年の後に致すというならばその志は壮といえれば壮である。だが百年の後の祖国を思うものは、現在の祖国を傍観してよい理由はない。今の世に知者あり学者あり論者あり、しかし目下の祖国が必要とするものは、学問の武士であり思想の国土である。

六 日本の使命

私はここまで読者と共に、わき立ち渦巻く現実の中に身を置いてきた。ここでしばらく身を現実から抜いて、静かに高所から我々自身を俯瞰しよ

うではないか。

あらゆる国民は、自らの存在を維持する権利を持つ。しかしその国民が世界文化に貢献すべき何ものをも持たないならば、それはただ動物的存在を続けるにとどまろう。それでは日本国民に果たして世界史的使命があるであろうか。

世界史家がいうところによれば、異種文化が互いに接触して、いずれの文化をも滅ぼすことなしに、調和・融合の結果としてより高度の文化を創造したことが、世界の歴史を通じて三度あった。第一は西暦紀元前3世紀にギリシャと東方（西方アジア）の文化が接触して、ここにギリシャ・東方の文化が成立した場合であり、第二は紀元初期にギリシャとローマの文化が接触して、ギリシャ・ローマの文化が成立し、第三は紀元4、5世紀頃、北方のゲルマン民族が南下してローマ文化と接触し、ローマ・ゲルマンの文化が成立した場合である。こうして三度まで異種文化が接触した場合に、もしいずれかが他を圧倒して滅ぼしたならば、残った文化は決してより高度な文化にはならなかったろう。しかし互いに他を傷つけることなく、双方の何れもが残って補完したために、より高度な文化が成立して、今日のヨーロッパ文化を見たのだといわれる。そして世界史家はさらに言葉を続けていう、第四の文化の接触が今や、ヨーロッパと東洋の間に起こりつつあると。

異種文化の接触という観点に立てば、日本の明治時代は世界の歴史における画期的時代であった。それまでも西洋と東洋の接触がなかった訳ではない。インドと西洋の交通は早くから開かれ、西域を通して中国と西洋も交通していた⁵⁴。しかしそれは何れも低段階の文化の接触に過ぎなかった。ところが日本の明治時代に接触した西洋の文化と東洋の文化とは、以前のような低段階のものではなかった。明治維新（1868年）前後の西洋の文化は、すでに何度かの接触を経過した高度な文明であった。これと接触した日本の文化は、日本固有の文化のほかに、千数百年前に中国から儒教を入れインドから仏教を入れ、東洋文化を集大成した、ただ一つの代表的東洋文化であった。ここに東西の文化は接触した。世界の歴史にかつてない大

規模な異種文化の交渉であった。この時日本の採った態度は、インドのように西洋文化に圧倒されることでもなければ、中国のように西洋文化に反抗することでもなかった。謙遜に寛容に己を謙虚にして西洋文化を受容することであった。しかもそのために日本は東洋の独自のものを失わずに、伝統の文化を強靱に保持しつつ、西洋文化に胸を開いた。この謙虚な受容力と強靱な伝統力によって、東洋と西洋の異種文化は、初めて接触し融合し調合することができた。この過程は今後も永久に継続されねばならないであろう。がしかし日本は明治時代の事例によって、異種文化の接触調和に十分な能力・資格があることを証明した。世界史家のいう第四回目異種文化の接触は、日本こそその負担者でなければならない。そして日本こそより高度な文化の創造者でなければならない。これが日本国民に課せられた世界史的使命である。あらゆる国民は何らかの特殊文化を持つことにより、世界文化に貢献し得るに違いない。しかし日本の負う世界史的使命は、これとは比較にならないほどの重大な使命である。かくて日本国民は世界文化のために、自己の存在を主張する権利がある。

だが日本の世界史的使命はこれだけではない。人は世界の歴史をそれぞれの立場から眺めることができるだろう。前の異種文化の交渉という問題も、世界の歴史を眺める一つの観点である。しかし私の見るところでは、世界の歴史は人間の歴史である。人間の歴史は、人間が自己の人格性に目覚めた時より始まる。およそ人は人格となり得る力を持つ、この能力が人格性といわれる。人は人格性を与えられるがゆえに、神聖なる目的にして、決して単に手段として用いられるべきものではない。人格性に目覚めたのは、ギリシャのソクラテスに始まるといわれるが、それ以来の歴史は、一方では人格とは何かを探って、人格の観念を深化したことであり、他方では人格の観念を適用すべき対象の拡張であった。人格とは単に知識的なものにとどまるか、あるいは芸術的なものでもあり、道徳的なものでもあるか。それぞれの時代にはそれぞれの一方に偏していたが、やがてついに人格とはこれらのすべてを総合したものであることが明らかにされた。これが人格の観念の深化の歴史であった。この歴史と並行して、人格の観念の

適用されるべき対象の拡張が行われた。ソクラテスのギリシャでは、奴隷は当然のものだとして怪しまれなかった、すなわち奴隷は人でありながら、人格性を持つものと思われなかったのである。だが人と思われるべき人の範囲は徐々に拡大された。貴族も平民も共に人であり、そのために平等である。男性も女性も共に人であり、決して差別を置くべきではない。資本家も労働者も共に人であり、それゆえに対等に取り扱われるべきである。人格性に目覚めた西洋の人々も、ここまでは人の範囲を拡大することができた。しかし彼らは人を当然に白色人種に限定して怪しまなかった。だが白色人種も有色人種も共に人であることにおいて異なるところはない、ただ違うのは皮膚の色だけである。

なるほど19世紀に奴隷解放は行われた。しかしそれはアフリカの黒人を対等の人と見なしたのではなくて、実に優越者が黒人に憐憫の情を与えたにとどまる。かくして人格の観念は、有色人種に対しては限界点に到達して、これ以上に徹底することができなかった。白色人種がアフリカやアジアにおいて、いかに横暴を極めたか、単に手段としてのみ人間を取り扱ったか。

だが白色人種は日本の台頭に遭遇して戸惑った。いまだかつて経験せざることを新たに経験したからである。そこに白色人種に劣らない国民がいる。これを従来のように劣等な有色人種と見なすことはできなくなった。初めは優越者の自負心をもって日本国民を指導した、次いで日本国民が成長するや、これを対等と見なさざるを得なくなった。しかし永い伝統的因習から、ここに人格の観念を適用することは容易ではない。この複雑な心理から、彼らの我々に対する嫉視・反目が現れるのである。だが嫉視や反目は、優越者と劣悪者の間には行われぬ。好むにせよ好まざるにせよ、彼らは暗黙の間に日本国民を対等の人間と見なしているのである。これこそ有色人種に対する観念の一革命ではなからうか。白色人種も意識せず我々日本国民も意識しない間に、人格観念の適用は徐々に拡張され、今や有色人種にまで及ぼうとしている。白色人種にここまで至らせたのはひとえに日本国民の賜物である。日本国民がいなかったならば、彼らは従来の

観念を平然と維持したであろう。人格観念の適用を徹底させたこと、これが日本国民の世界史的功績であり、今後も継続せねばならない世界史的使命である⁵⁵。ここにも我々の存在を主張させる根拠がある。

悠遠な世界史的使命から一步を退いて思う。昭和16年(1941年)という我々の現在は、最近の日本の歴史の中の、いかなる時点に位置するものであろうか。

明治維新(1868年)以来現在まで73年が経過したが、これを思想的に見れば、五つの時期に区別することができると思う。これらの時期を通じて日本を動かした問題が二つあった。一つは日本が重点を国内の充実に置くか、外国との関係に置くかの問題で、前者は退いて己を整えるものとすれば、後者は進んで膨張・発展に乗り出すのである。日清戦争、日露戦争、満洲事変、日中戦争、等は後者の例である。他の一つの問題は日本が外国の文化に傾倒するか、あるいは自国の固有の文化を自覚して、その価値を強調するかである。この二つの問題は互いに錯綜してくるが、多くは対外的に膨張・発展する時は、日本の固有の文化に目覚める時なので、かくして思想史上に五つの時期が区別される。第一期は明治維新から始まり明治20年に至る間で、この時期に日本は熱狂的に外国思想を輸入した、そうして輸入された思想は自然主義・個人主義・自由主義であった。これに対する反動が明治20年前後から起こり、これが第二期である。この期間には日清戦争と日露戦争があり、日本固有の文化を自覚し、理想主義・国民主義・国家主義の時代といえる。やがて明治40年頃から第三期に入り、ある意味で第一期に復帰したともいえるので、理想主義・個人主義・自由主義が支配的であり、大正10年頃から第四期が始まり、主としてマルクス主義が勢力を振るった。昭和6年9月の満洲事変を契機として第五期に入る。この時期は明治20年から40年に至る第二期と類似し、対外的膨張・発展の時代であり、同時に理想主義・国民主義・国家主義が圧倒的である。第二期が第一期に対する反動だとすれば、第五期は第三期と第四期の双方に対する反動である。第五期はすでに10年が経過したが、これがいつまで継続する

かは予測することができない。いつかは静かに己を省みて内を整える時期に移るだろう。だが昭和16年の現在は、明治以来の思想史上の第五期にある。これが我々の所在を明らかにするのに役立つであろう。

それでは我々の現在は、最近の世界の歴史の中のいかなる時点に立っているのか。第19世紀初期以来の世界の歴史は三期に分けることができる。第一期はフランス大革命から始まり、1870年頃までの時期で、国内的には個人主義・自由主義、国際的には世界平和、自由貿易を理想とし、1860年にコブデンとナポレオン三世が英仏通商条約を結んだのが⁵⁶、最高潮であったと見られる。ところがその後新しい二つの現象が現れた、一つは1871年のドイツ統一であり⁵⁷、他は1866年南北戦争を終えた米国の統一である⁵⁸。もちろん前者の及ぼした影響は後者よりもはるかに大きい。そこから第二期が始まる。この時期にはようやく国家間の対立競争が激化して、関税戦争なども現れ、同時に国内的には個人主義・自由主義の修正が行われ出した。しかし第二期は根本においては第一期と類似していた、従って多くの方は注意を逸するが、第二期は第一期から第三期への過渡を為したほど、前期の様相はすでに変化していたのである。第二期の最終にしてやがて第三期の開始の原因となったのは、前大戦である。大戦はデモクラシーと専制主義の闘争だといわれて、連合側側の勝利はデモクラシーの勝利だと思われた。なるほど全世界にわたって、自由主義とりわけ政治的自由主義が行われ、世界平和を保証する使命をもって国際連盟は成立した。しかし大戦後に行われた政治的自由主義こそ、むしろかえって自由主義の欠陥を露呈させて、かえって自由主義に吊鐘を鳴らすことになった⁵⁹。思うに英米仏白等の国々を除いては⁶⁰、戦後の複雑な問題を処理するには、自由主義的政治制度は不慣れでもあり敏活を欠き、能率を上げることができなかったからである。第三期の消極的原因がここにある。

さらに前大戦はこれまでの戦争と違って、三つの重要な問題を残した。第一は大戦終結一年前すなわち1917年に起こったロシア革命で、世界史上初めて社会主義国家が成立し、しかも世界革命を目指して、各国の攪乱を始めたことである。最も活発な攪乱は、1923年までであるが、伊独はじめ

東欧の諸国は、何れもその攪乱を受けざるを得なかった。第二は大戦が世界各国を巻き込んだために、大戦後には各国の経済関係は緊密に影響し合うこととなり、一国の経済変動は常に他国に波及し、全世界をそれに巻き込まずにはおかないほどとなった。これに加えてドイツが戦勝国に賠償金を支払い、戦勝国相互の戦費債務の支払いがあり、各国間の経済関係を錯綜させたのである⁶¹。大戦後の景気変動の跡を見ると、次のような循環がある。

1919－1920年 好景気

1921－1923年 不景気

1923－1929年 好景気

1929－ 年 不景気

この変動は何れもある地方から始まったものが、全世界に波及したのであるが、1929年の米国の農業恐慌に始まり、1931年にあった米国の金融恐慌がこれに拍車を掛けて⁶²、現在は世界不景気時代の中にある。

第三に大戦は各国の国民主義・国家主義を強化した。たとえデモクラシーのためであろうとも、戦争遂行にはかえってデモクラシーと対立する制度を採らねばならぬ。各国は非常措置として独裁統制を敷き、いやが上にも愛国心を煽動し、軍需品・食糧品産業に国家的保護を加えねばならない。戦争が終わったからといって、すぐにこれらの保護を打ち切ることはできない。かくしてデモクラシーのための大戦は、かえって反対の方向へと推進する結果となった。

以上に挙げられた四種の事項、すなわち第一に自由主義政治制度の破綻、第二にコミンテルンの活動攪乱⁶³、第三に各国経済の複雑な結合、第四に大戦が育成した国民主義・国家主義、これらの四項は互いに密接に関係してくるので、各国の不景気に乗じてコミンテルンの攪乱は活発となり、これを取り締まるために国家主義は強化されるし、不景気回復のための輸出を奨励し、輸入を阻止する。かくして補助金の交付と関税の障壁が設けられ、これが国家主義を強めて各国対立の状況を激化させる。こうした複雑な問題を処理するのに、自由主義政治制度はいよいよ弱点を暴露する。こ

れを要するに以上の四項目が錯綜して、大戦後は一路国民主義・国家主義へと急いだ。かくして第三期が始まった。国民主義・国家主義は必ずしも独裁とか統制に帰結するとは限らないが、自由主義政治制度の破綻が現れた以上は、ここに導かれるのは当然である。しかしいかなる国に、いつ政治的变化が現れるかは、各国特殊な事情に関係するが、第一期の不景気時代の1922年に、ムッソリーニのファッショ進軍があり、第四期の不景気の1933年に、ヒトラーが政権を掌握したことは、我々の注目に値する。日本は連合国に属したとはいいながら、ヨーロッパと隔離した特殊な地位にあったから、ヨーロッパと必ずしも事情は同じではないが、しかし世界の波動は東アジアにも及ぼざるを得ない。そこで私の結論をいえば、昭和16年の現在は、19世紀以来の世界の歴史の第三期に位置する。そしてこれがちょうど明治以来の日本の歴史の第五期と合致するのである。

私は歴史的回顧を離れて、徐々に現実近づこう。国民主義・国家主義が台頭したといって、それは国内問題についての変革に現れようとも、必ずしも国際関係へ変動を及ぼさずに済むこともあり得ないことではない。ところが大戦後の国民主義・国家主義の台頭には、有力な理由として各国の錯綜した経済関係の調整、不景気の挽回があったことを忘れてはならない。ここにおいて国民主義・国家主義は国際関係に波動を及ぼさずにはおかない。それではこれを解決する方法がなかったかという、必ずしも絶無ではなかった。平和の殿堂たる国際連盟が、もし正当に運用されたならば、国際平和の上に立って解決ができたろう。すなわち現在の世界秩序の上に立って、金融・原料・販路・労働の自由開放を断行することである。だが国際連盟はその成立の当初から、これを為し得ない運命を負わされてきた。なぜならば国際連盟は各国の現状維持を基礎とし、現状維持に従うものは平和の美名が謳われ、これに反するものは侵略の汚名を負わされる。しかし現状維持とは何を意味するかといえば、現在において持てるものに幸いし、持たざるものに災いする。無限なるものについては、持つものと持たざるものとの対立は起こらない。しかし物質は有限である、一方に持

つものがあれば、そのことがすでに持たざるものを生ずるのであり、持てることにより、持たざるものから奪っているのである。ローマ法以来正義とは、あらゆるものにその分とするものを帰属させることにありとされているが、世界の現状維持自体が正義に反する。現状維持に反するものが汚名を浴び、これに従うものが美名を与えられるのは、持てるものが持つことを持続せんとする利己的道德秩序ともいえるだろう。英米がいかに現状維持に執着したかは、米国がモンロー主義を尊重することを⁶⁴、英国が特殊利益を尊重することを、連盟規約の中に挿入したことをみれば分かる。真に世界平和を維持しようと思うならば、持てる英米が自らの持てるものを放棄するか開放するかでなければならない。これを為さずして、世界平和を維持しようという国際連盟は、真の平和を実現し得ない。サン＝ピエール、カント以来永久平和への憧憬は久しい⁶⁵。永久平和を実現するかに思われた国際連盟は、この根本問題に逢着して立ちすくみのままとなった。人間が互いに殺し合わねばならないのは、あまりにおぞましい人の世の悲劇である。戦争はやむを得ざる手段ではあろうが、決して永久の目的ではない。だが平和の殿堂があつた国際連盟のようであれば、浜の真砂のように⁶⁶、人の世に戦いは絶えないだろう。

国際平和の上に立つての解決が絶望だとすれば、残された解決は一つしかない、それは国際現存秩序の打開である。ここにおいて西にヨーロッパ新秩序の声があり⁶⁷、東に東亜新秩序の声が上がる。後者一転して東亜共栄圏の確立となる⁶⁸。

東亜共栄圏の確立とは、言うに易くして行ふに難い⁶⁹。この旗幟を内外に掲げた場合に⁷⁰、いかなる障害が起こるか、その一切を洞察したであろうか。これを実行するのに必要な用意を、残るくまなく整えたであろうか。この洞察なくこの用意なくして、易々と実行されるには、東亜共栄圏の確立とは、あまりに荊棘に満ちた難路である⁷¹。だが日本はあえてこの旗幟を掲げた。個人がその言葉の責任を重んずるべきであると共に、国家もまたその標榜するところに責任を持たなければならない。その反対者に対しては威信のために、その共鳴者に対しては誠実のために、日本国民は重大

なる義務を負ったのである。

私に率直にいわせれば、今日の事態は遠く満洲事変に際し、少なくとも日中戦争の出發において、つとに予想されたことであった。それなのに我々は今日の事態を洞察していたであらうか。これのために万般の用意を整えていたであらうか。東亜共栄圏の確立という快挙に向かうには、少なくとも日本国民の精神的準備は為されていなかった。この目的にまで一億の魂を高揚させるのに、十分な素地が作られていたかどうか。圏内の共存共栄を図るべき同志の国民に対して、果たして十分な共鳴と共感を呼び起こすだけの計画が為されていたかどうか。私はこれを疑う。

だがしかし我々の祖国は、満洲事変において第一歩を踏み出し、日中戦争において第二歩を、日独伊軍事同盟において第三歩を踏み出した。そして我々日本国民は結局これに対して、共同の責任を持たなければならない。我々に退くべき道は、すでに閉じられている。それでは現在の場所に停止するか、しかし停止は消極的な前進である。前進によって得るものなく、退いて得るものもない。我々の道はただ前方にある。我々に残された道は、すでに歩んで来た道を進むほかはない。そうしなくてむだに躊躇逡巡するならば⁷²、1918年秋のドイツの運命が、再び我々の頭上に落ちてくるのみであらう。これに耐え難いとすれば、我々は座して待つべきでなく、進んで血路を開くのみである。

政府は我々の前に横たわる二つの途を熟視して、決然として一つの途を選ばなければならない。そしてこの途を進むためには、一切を賭して身命を捨てる覚悟を持たなければならない。さらに仮にも一つの途を進む以上は、怯むところなく臆するところなく、あくまで貫徹しなくてはならない。国民は政府と共に、苦難に耐え危険を凌いで、目的の貫徹に一致結束しなくてはならない。いかに苦難が多かろうとも、戦場に臨む武士は退くことを考えなかった。彼らは「個」を捨てて「全」のために捧げた。あの自己犠牲の精神が銃後の生活に生かすこと、これが我々国民の道徳的義務である。そしていかに現状に不満であらうとも、左翼の煽動に乗せられてはならない。むだに混乱と紛糾を費やすにとどまって、何の得るところもない。

ここでもドイツ国民の歴史から、我々は教えられるところがなければならぬ。

我々の今や臨みつつある運命は、日本の歴史あって以来の未曾有のものである。だがこの途を前進し終えるならば、我々に道徳的な勝利がある。そうしなくてただ右顧左眄してたたずんでいるならば、たとえ物質的に救われようとも、道徳的には亡国の民となろう。

私に何度か繰り返させよ、我々の前に二つの途がある。そしてただ二つしかない。一つは我々を亡国へと導く、これを採らぬとすれば、他の途を採らねばならない。あらゆる国民は、自己の生存を維持する権利を持つ、ましてや我々には悠遠なる世界史的使命が身に負わされている。お願いである、この国民は屈してはならない、この国民は亡んではならない。

あとがき

本書で述べられた私の思想を、より系統的に読もうとされる読者には、私の『グリーン思想体系』を薦めたい⁷³。同書をやや平易にしたのは『学生に与う』である⁷⁴。日中戦争については、事変発生前一ヶ月に『日本評論』に「迫りつつある戦争」を書き、極東の状況が大戦に至る可能性を説いて、読者の決心を促した。事変勃発後には『中央公論』昭和12年12月号に「日支問題論」を寄せ、中国に対する態度と講和条件につき発表し、翌年1月号の同誌に「外交の刷新」を載せた⁷⁵。マルクス主義に対する私の見解は諸著に散在しているが「欧州最近の動向」の中の「コミンテルンの崩壊」という章が⁷⁶、最も主要なるものである⁷⁷。

(了)

【訳註】

- 1 河合榮治郎『国民に懇う』『三 政府への進言』までの現代語訳については、芝田秀幹「現代語訳 河合榮治郎『国民に懇う』」(沖縄国際大学大学院法学研究科『沖縄法学論叢』第8号、2017年)15-43頁参照。また、本現代語訳の底本には、社会思想研究会編『河合榮治郎全集』第14巻(社会思想社、1967年)に収録された『国民に懇う』を使用した。なお、読者の理解を促すため、適宜表現・表記の変更、読点・中黒の挿入を施した。また、原文中の一部「て・に・を・は」等について、現在主に用いられる表現へと適宜変更した。表現・表記の変更については、すべて本訳註77に掲示した。底本中の編者による註は、

- 形式的であり、かつ僅か数点のみ見られることからすべて割愛した（河合自身による註釈はない）。ちなみに、訳者（芝田）が河合に関心を寄せたのは、（すでに以前の翻訳時に述べたように）研究上のライフワークであるイギリス理想主義（British Idealism）の哲学者バーナード・ボザンケ（Bernard Bosanquet: 1848-1923）の政治思想を、河合が我が国に初めて本格的に紹介した人物だったことによる。ボザンケについては、芝田秀幹『イギリス理想主義の政治思想—バーナード・ボザンケの政治理論』（芦書房、2006年）、同『ボザンケと現代政治理論—多元的国家論、新自由主義、コミュニタリアニズム』（芦書房、2013年）参照。特に、河合とボザンケの関係については、後者の第3章参照。なお、以下の訳註では、松井慎一郎『河合榮治郎—戦闘的自由主義者の真実』（中央公論新社、2009年）、木下康彦他編『改訂版 詳説世界史研究』（山川出版社、2008年）、佐藤信他編『改訂版 詳説日本史研究』（山川出版社、2008年）その他三省堂『大辞林』、小学館『デジタル大辞泉』、小学館『日本大百科全書』、『ブリタニカ国際大百科事典』等を参照した。
- 2 ノモンハン事件。1939年に満州国とモンゴル（外蒙古）の国境ノモンハン付近で起きた日本とソ連の両軍の大規模な武力衝突。「満ソ国境紛争処理要綱」の方針に従って、5月12日に、偶然にもノモンハン付近でハルハ河を越えた外蒙軍と満州国軍が衝突する事件が発生、これを機に戦闘が始まったが日中戦争の最中に事件が日ソ戦争に拡大することを恐れた大本営は不拡大方針を決定、政府も事件の平和的解決の方針を決めた。だが、関東軍はこれを無視して攻勢を拡大したものの、ソ連軍の国境線回復のための総攻撃によって日本軍第二師団は壊滅的大敗を喫した。その後、ヨーロッパでドイツによるポーランド侵攻が始まり第二次世界大戦が勃発したため（9月1日）、大本営は攻撃の中止と兵力の後退を厳命、モスクワにおける交渉妥結を急ぎ、モロトフ外相と東郷茂徳大使の間に停戦協定が調印されたのは9月15日のことであった。
 - 3 「銃後」とは戦場の後方のこと。また、転じて直接戦闘に携わっていないが、間接的に何かの形で戦争に参加している一般国民のこと。
 - 4 「指を染める」とは、食物を指先につけてなめることから、善悪を判断すること。さらに転じて、物事に手をつけること、やりはじめること。この場合、「職場で他人から少しも介入させない（批判させない）だけのことをしているか」、つまり「完璧な仕事をしているか」という意味。『春秋左伝』（『春秋左氏伝』）「宣公四年」より。中国・春秋時代の歴史書で、五經の一つである『春秋』は、魯（山東省）の史官が遺した記録に孔子が加筆して自らの思想を託したといわれる。『春秋左伝』（『春秋左氏伝』）はその注釈書で魯の左丘明著、全30巻。
 - 5 「巖」「巖」とは、高く大きな岩のこと。
 - 6 「地を掃う」とは、何も残らないですっきりなくなってしまうこと。『漢書』「魏豹伝賛」より。『漢書』は中国の正史の一つで、前漢の歴史を記した紀伝体の書、全120巻。後漢の班固の撰、妹の班昭の補修。82年頃成立といわれる。
 - 7 「市井の無頼の俠客」とは、街で見かける定職も持たない渡世人のこと。
 - 8 「阿諛追従」及び「媚態を呈す（示す）」とは、大いにあるいはやたらとこびへつらうこと。
 - 9 大谷吉継は安土桃山時代の武将。刑部少輔。羽柴（豊臣）秀吉が柴田勝家を破り全国制覇の基礎が築かれた戦いである賤ヶ岳の戦い（天正11年：1583年）で活躍し、秀吉の信任も厚く奉行にもなった。その後越前敦賀五万石をあてがわれ、文禄・慶長の役では石田三成らと軍監を務めた。関ヶ原の戦いでは親友の石田三成に懇願され、敗戦覚悟で西軍に加わった。戦闘では、裏切り者小早川秀秋の大兵に背後から攻撃を受けて陣没した。ハンセン病による盲目のため、駕籠に乗っての指揮であったといわれる。
 - 10 「竿頭一步を進め」とは、正しくは「百尺の竿頭に一步を進む」であり、『正法眼蔵隨聞記』にある言葉。百尺の竿の先に達しているが、なおその上に一步を進もうとすることで、すでに努力・工夫を尽くした上にさらに尽力することをいう。また、十分に言を尽くして説いた上に、さらに一步進めて説くことのとえ。『正法眼蔵隨聞記』は、禅僧で曹洞宗開祖道元禅師の二歳年長の弟子で、永平寺二世である孤雲懐奘が記した曹洞禅の語録書。
 - 11 河合は、1937年12月26日から翌年1月10日にかけて、中国華北地方への視察旅行に向向き、帰国後『日本評論』1938年3月号に「北京と天津」という一文を発表している。『河合榮治郎全集』第19巻（社会思想社、1969年）374頁、松井、前掲書、2009年、265-266頁。

- 12 「偉丈夫」とは、体が大きくてたくましい男、また人格のすぐれている男のこと。「威武をもって富貴をもって…」は『孟子』「滕文公章句下」の「富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫」より。いかなる富貴（財産や高い地位）もその心を乱すことはできず、いかなる威力や武力で圧迫してもその志をまげさすことはできぬ。こういう人こそ真の偉丈夫というものだとの意味。『孟子』は、中国の戦国時代中期の思想書。思想家としての孟子の言行をその弟子たちが編纂したもの、7編。民生の安定、徳教による感化を中心とする王道政治を主張し、また性善説に基づく道徳論・修養論を展開している。四書の一つで儒教の必読書とされた。
- 13 「百年の大計」とは、遠い将来まで見通しを立てた計画のこと。
- 14 法然（1133-1212年）は浄土宗の開祖。黒谷上人・吉水上人。比叡山で源光らに師事した後、1175年専修念仏の教えを唱えて浄土宗を開いたが、旧仏教からの激しい圧迫を受け、1207年専修念仏は停止され四国に流されたが後に赦免、帰洛した。親鸞（1173-1262年）は浄土真宗の開祖。初め比叡山で天台宗を学び、のち法然の専修念仏の門に入るが、1207年念仏停止の法難に遭い越後に流罪。赦免後関東に移り住み布教と著述を行う。法然の思想をさらに徹底させ、絶対他力による極楽往生を説き、悪人正機を唱えた。道元（1200-1253年）は禅僧で日本曹洞宗の開祖。比叡山で天台宗を、建仁寺で禅を学び、1223年入宋。帰国後、京都に興聖寺を開く。1244年越前に移り、大仏寺（現永平寺）を開いた。日蓮（1222-1282年）は日蓮宗（法華宗）の開祖。12歳で入仏入りし諸宗を各地で学ぶ。「法華経」によってのみ末世の国家の平安もありうることを悟り、1253年に日蓮宗を開き他宗を激しく攻撃した。1260年に「立正安国論」を幕府に献じ国難を予言していれられて、伊豆に配流。赦免後も幕府・諸宗を批判し続けたために佐渡に流された。その後再び許され甲斐身延山に隠棲。晩年、下山後臨終に際して六老僧（日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持）を定めて東京池上で没した。
- 15 「北嶺」とは、高野山を「南山」と呼ぶのに対して比叡山のこと。また、比叡山延暦寺も「北嶺」といい、その場合は奈良の興福寺を「南嶺」または「南都」と呼ぶ。
- 16 「万巻の」とは、「数多くの」という意味。
- 17 「南都」とは、京都を「北都」というのに対し、奈良のことを指す場合もある。
- 18 「煥発」とは、詔勅（詔書や勅書など天皇の意思を表示する文書の総称）を広く国の内外に発布すること。
- 19 「聖慮」とは、天子の考え、天子の気持ちのこと。聖慮。
- 20 大日本帝国憲法（明治憲法）の上諭。上諭とは、憲法発布に際して天皇がその頭書に自らの言葉として記された文章のこと。大日本帝国憲法で上諭は日本国憲法の前文に相当。以下意訳。「私（天皇）は歴代の天皇が残した功績をうけたまわり、永久に同一の続く系統の帝位につき、私が親愛する臣民を、私が歴代の天皇が恵み愛し慈愛をもって養育して下さった臣民であると思い、臣民の大きく立派な徳と生まれつきの才能を発達させることを願い…」。
- 21 「高き屋に登りて見れば 煙立つ 民の籠は 賑はひにけり」は『新古今和歌集』巻七賀歌巻頭。仁徳天皇御製として伝わった歌。第16代仁徳天皇が即位して4年目、高台に登り見渡したところ家々から炊事の煙が立上っており、民は貧しい生活を送っていることに気づき、以後3年間年貢などを免除し、自らも着物や履物を修繕せず、宮殿も放置された。三年後、民は豊かになり高台からは炊事の煙が上っているのを見て天皇は喜び、自分は富んだと述べた。それに対し皇后は、皇居は荒れ放題なのになぜ富んでいるのかと問うと、民が貧しいのは自分も貧しい、民が富んでいるのは自分も富んでいる、と陛下は答えたという。また「軫念」とは、天子が心を痛めること、また天子の心のこと。
- 22 「聖慮」とは、天子の考え、天子の気持ちのこと。聖慮。
- 23 「荆棘（けいきょく）」とはイバラなどとげのある低木。また、イバラなどの生い茂る荒れた土地のこと。転じて、障害・妨げとなるもの、困難なもののこと。
- 24 「天下の憂いに先立ちて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ」の一部。世の中の人に先立って天下国家のことを心配し、人々が楽しんだあとに楽しむ、という意味で、政治を行う者の心構えを説いた言葉。先憂後楽。中国北宋の政治家（副宰相）・学者である范仲淹（989-1052年）の言葉で散文の編『岳陽樓記』（1046年）から。
- 25 洞ヶ峠は、京都府八幡市と大阪府枚方市との境にある峠で、標高約70メートル、淀川・

- 天王山が眺望できる。天正10年（1582年）の山崎の戦いで、明智光秀が軍を進め、筒井順慶が明智勢に味方するかどうか戦況をながめていたという言い伝えで知られる。ここから、「洞ヶ峠をきめ込む」とは有利な方につこうと形勢をうかがうこと、日和見を意味する。
- 26 ドイツ社会民主党（Sozialdemokratische Partei Deutschlands: SPD）は、1875年創立のドイツ社会主義労働者党の後身で、1890年に改称され現在に至る。1891年エルフルト綱領ではマルクス主義の立場に立つことを明らかにし、以後勢力を伸ばして1912年の議会では第一党となった。
- 27 カイザーとは、第3代ドイツ帝国皇帝ヴィルヘルム二世のこと。「二 ただ二途あるのみ」（芝田、前掲訳、2017年）訳註25参照。
- 28 ドイツ独立社会民主党（Unabhängige Sozialdemokratische Partei Deutschlands: USPD）は、ドイツ帝国末期からワイマール共和国初期にかけて存在したドイツの社会主義政党。「域内平和」路線をドイツ社会民主党が取ったことにより、同党を離党したマルクス主義政治理論家カウツキー（Karl Johann Kautsky: 1854-1938）らによって結成された。
- 29 原文では「指を染める余地」。「指を染める」については訳註4参照。
- 30 キール（Kiel）暴動等、この間の経緯については、「二 ただ二途あるのみ」（芝田、前掲訳、2017年）訳註28参照。
- 31 1919年1月、ベルリンでスパルタクス団（Spartakusbund: 1915-1918）による暴動が発生。スパルタクス団とは、ドイツの急進的マルクス主義者らによる政治団体のことでドイツ共産党の前身。ドイツ社会民主党から分派して誕生。
- 32 ノスケ（Gustav Noske: 1868-1946）はドイツの政治家。ドイツ社会民主党所属。ヴァイマール共和国最初期の国防相で、スパルタクス団によるベルリン暴動を復讐した兵士などで結成された義勇軍を利用して武力鎮圧した。
- 33 ヒトラー及びこの間の経緯については、「三 政府への進言」（芝田、前掲訳、2017年）訳註52参照。
- 34 「春秋の筆法」とは、中国春秋時代に関する歴史書『春秋』が、些事をとりあげて大局への関係を説いたことから、間接的な原因を直接的な原因として表現する論法のこと。また、論理に飛躍があるように見えるが、一面の真理をついているような論法のこと。『春秋』については、訳註4参照。
- 35 「殷鑑遠からず」とは、戒めとすべき他人の失敗の例。中国最古の詩集で五經の一つである『詩経』の「大雅」の「蕩」から。殷王朝の鑑（手本）は、遠く古代に求めなくても、前代の夏か王朝の滅亡がよい戒めである、つまり戒めは身近にあることのたとえ。
- 36 新体制については、「序」（芝田、前掲訳、2017年）訳註8参照。
- 37 「弊履を棄つるが如し」とは、惜しげもなく捨てるさま。
- 38 木下半治（1900-1989年）は日本の政治学者。東京帝国大学法学部卒。戦後1954年に「フランス国家主義運動史」で東京大学より法学博士を取得。東京教育大学教授、明治大学政治経済学部教授を歴任。ちなみに、我が国のフランス政治体制研究及びゴリズム研究の第一人者であり、訳者（芝田）の大学院時代の指導教授でもある櫻井陽二（1942-：明治大学名誉教授・博士（政治学）は、明大院生時代、同大学政治経済学部教授だった松平齊光（1897-1979年）に師事したが、明治大学に採用された後の助手時代には木下半治にも師事していた。なお、松平齊光の生涯とその研究成果については、櫻井陽二『松平齊光における政治科学と天皇制』（芦書房、2014年）参照。
- 39 「顧みて他を言う」とは、返答に窮して本題とは別の事に話題をそらしてごまかすこと。『孟子』の「梁恵王章句下」より。『孟子』については、訳註12参照。
- 40 「隠約の間に意志を通ずる」とは、簡単な言葉のうちに奥深い意味をこめていること。
- 41 「袖手傍観」「拱手傍観」とは、重大な事態に当面しながら、手をこまねいて何もしていないこと。
- 42 「符節を合わせたよう」とは、符節＝割り符を合わせたように矛盾がなくぴったりと合うさま。符合するさま。
- 43 「九牛の一毛」とは、たくさんの中の一本の毛の意から、たくさんの中のごく小部分のこと、とるにたりないこと。『漢書』「司馬遷伝」より。『漢書』については訳註6参照。

- 44 「寂として声なし」とは、しんとして静かなさま、あるいはひっそりとしているさま。
- 45 『地に塗れる』とは、戦いに負けて立ち上がれなくなることを、敗北すること。『史記』『高祖本紀』より。『史記』は中国二十四史の一つ。130巻。前漢の司馬遷著。紀元前91年頃完成といわれる。
- 46 教学刷新とは、美濃部達吉の天皇機関説問題(1935年2月)を発端として翌年10月の教学刷新評議会(文相の諮問機関)の答申に基づき展開された、政府・軍部・民間の右翼による日本精神と国体論に立脚した教育・学問・思想の統制政策及びその運動のこと。市場拡大のための軍事侵出を企図する政府・軍部にとって、社会主義や自由主義の台頭とその学生・知識人・労働者への浸透は国内的不安要因として問題視された。
- 47 ナポレオン一世は1806年、南ドイツ、ライン右岸のドイツ16の邦をまとめて彼を盟主とするライン同盟をつくらせ、神聖ローマ帝国を名実ともに消滅させた。プロイセンはナポレオン一世に脅威を感じ、ロシアと同盟してフランスに宣戦した。ナポレオン一世はイエナ・アイラウでプロイセン軍を、アイラウ・フリースランドでロシア軍を破り、1807年ティルジット(Tilsit)で両国に屈辱的な内容の講和を押し付けた。特に、プロイセンは領土の半分を奪われ、莫大な賠償金と軍備制限が課せられた。
- 48 シュタインについては、「三 政府への進言」(芝田、前掲訳、2017年)訳註43参照。ハルデンベルク(Karl August Fürst von Hardenberg: 1750-1822)はプロイセン王国の宰相(1810-1822)。シュタインに続き自由主義的国制改革を実施した政治家。
- 49 フンボルト(Friedrich Wilhelm Christian Karl Ferdinand Freiherr von Humboldt: 1767-1835)はドイツの政治家・言語学者。ベルリン大学創設者の一人で、またプロイセン王国の公使としてドイツの統一に寄与。シラーやゲーテとも親交を結んだ。著書『国家活動の限界を決定するための試論』(1851年)はジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill: 1806-1873)の『自由論』(On Liberty)(1859年)にも大きな影響を与えた。
- 50 フィヒテ(Johann Gottlieb Fichte: 1762-1814)はドイツ観念論の哲学者。ベルリン大学教授、同大学初代総長。カントでは十分に統一されていなかった理論と実践、自然認識と道徳を、自我の根元的能動性を第一原理として統一。フランス革命の熱心な支持者であり愛国者でもあったフィヒテの情熱的な個性が、自我と自由を形而上学に高める哲学を生んだ。また、1807年から翌年にかけての、ナポレオン一世の支配下にあったベルリンの学士院講堂での連続講演「ドイツ国民に告ぐ」は、戦争敗北により自信を喪失したドイツ人に対して、ドイツ人の愛国的心情を鼓舞するものであった。
- 51 ナポレオン一世は1812年夏にロシアへの侵入を開始し、9月半ばにモスクワを占領したものの、冬の到来と長い補給路が危険にさらされることから、やがてロシアからの撤退を決意した。ロシア軍はフランス軍を追ってナポレオン一世の帝国に侵入、彼の同盟者であったヨーロッパの君主たちも次々とナポレオンを離れた。イギリス・プロイセン・オーストリア・スウェーデンはロシアと結んで新しい対仏大同盟が結成され、1813年10月、ナポレオン軍とライプチヒ(Leipzig)で対戦、新同盟軍がフランス軍を決定的に撃ち破った(諸国民の戦い)。ナポレオン一世はフランスに後退した。
- 52 普仏戦争(プロイセン＝フランス戦争: 1870-71年)はプロイセン＝フランス間の戦争。プロイセンが普墺戦争(プロイセン＝オーストリア戦争: 1866年)に勝利したもののドイツ統一の完成に至らなかったのは、ドイツの強大化・統一国家化を恐れたフランス皇帝ナポレオン三世(Charles Louis-Napoléon Bonaparte: 1808-1873)の干渉と妨害によること。このためドイツ統一には普仏両国の軍事対決は回避できないものとなり、フランスもまた国内外の政情不安からナポレオン三世は名誉回復を狙ってプロイセンとの対決の道を進んだ。かくして、1870年に普仏戦争が勃発したが、軍制改革が進展して動員組織が十分であり、実戦経験のある精鋭が多かったプロイセン軍が優勢に戦いを進め、スタン(セダン)(Sedan)の要塞でナポレオン三世を捕虜にすることに成功した。この結果、フランス第二帝政は崩壊し、その後ビスマルク(Otto Eduard Leopold Fürst von Bismarck-Schönhausen: 1815-1898)によってドイツ帝国が統一された(1871年1月)。
- 53 本稿で現代語訳を施している河合の『国民に懇う』が、前出のフィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』(Reden an die Deutsche Nation)を意識して書かれたことは疑う余地がない。実際、河合の愛弟子であり、京都大学名誉教授・元防衛大学校校長の猪木正道(1914-2012年)も、『国民に懇う』が単なる時局論議ではなく「フィヒテの『ドイツ国民に懇う』(原文ママ)

- に匹敵」した内容を持っている、と指摘している。
- 54 シルクロード（絹の道）。中央アジアを横断する古代の東西交易路の総称。中国を発し、タリム盆地の南北に点在するオアシス都市国家群を通り、バミール高原を越え、西アジアから地中海沿岸に達する。物資・文化・民族などの東西移動の最も重要な幹線。19世紀末にドイツの地理学者リヒトホーフエン（Ferdinand Freiherr von Richthofen: 1833-1905）が命名した。
- 55 しかし、まだこの時代は、世界的規模での人種差別撤廃という（とりわけ日本による）画期的主張はアメリカ・イギリスによって受け入れられることはなかった。例えば、パリ講和会議の五大国の一つとして最高委員会の構成国となった日本国は、国際連盟加盟国は外国人に対し人種や国籍による差別を設けてはならないとする人種差別禁止の条項を国際連盟規約の中に盛り込むことを提案した。パリの日本全権団は牧野伸顕(1861-1949年：大久保利通の次男)を中心に、各国の代表たちと折衝を重ねたが、日本国案の採択は困難であった。何となれば、アメリカでは人種差別問題は自国内の問題である（内政干渉にあたる）という強い反発があり、イギリスも自治領内、特に白豪主義（白人優先主義）をとるオーストラリアの強い反発にあって、両国とも日本案には賛成しなかった。日本国はさらに、文言を緩和してその趣旨を連盟規約の前文に入れるよう提案し、国際連盟委員会で16カ国のうち11カ国の賛成を得たものの英米両国の猛反対に会い、重要事項は満場一致を必要とするとの原則により、結局人種差別撤廃案は不採択となった。この点については、近時、岩田温（1983-：大和大学専任講師）が詳細に紹介している。岩田温『人種差別から読み解く大東亜戦争』（彩図社、2015年）参照。
- 56 コプデン（Richard Cobden: 1804-1865）はイギリスの政治家。綿業資本家を中心とする19世紀中頃のイギリスの自由貿易論者（マンチェスター派）の指導者。穀物法反対運動を成功させた。ナポレオン三世は、フランス第二帝政の皇帝（1852-70）。ナポレオン一世の弟オランダ王ルイ・ボナパルトの第三子。第一帝政没落後に亡命し、1836年と1840年に七月王政に対する陰謀を企てたが失敗。1848年の二月革命後に帰国、立憲議会議員に選出され、同年12月共和国大統領に選出。さらに1851年にクーデターを起こし、翌52年に国民投票によって皇帝に即位した。ナポレオン三世は、それまで西ヨーロッパで自国の脆弱な産業を保護してきた保護関税が逆に自国産業の近代化を遅らせていると理解し、1860年に国内製鉄業や綿業の反対を押し切って英仏通商条約（コプデン＝シュヴァリエ条約）を締結した。
- 57 1871年にビスマルクによってドイツは統一されてドイツ帝国が誕生した。ドイツ帝国は連邦制国家で、プロイセン王が皇帝を兼ね、立法府は各連邦の代表からなる連邦参議院と普通選挙制で代表が選出される帝国議会からなっていた。ただ、議会は政府に対してほとんど無力であり、ドイツ帝国の官僚にはユンカー（土地貴族）出身者が占めていたので、立憲君主制は形式的なものにとどまった。一方、ビスマルクは社会主義勢力・労働者勢力を抑止・弾圧するとともに、同時に労働者の生活保護や福祉のための社会立法を行った。
- 58 南北戦争（Civil War: 1861-65）はアメリカ合衆国と、その連邦組織から脱退した南部11州が結成した南部連合との戦争。アメリカは建国以来奴隷制度を認めてきたが、資本主義の発展と西方への領土拡大とともに奴隷制度は深刻な道徳的・政治的問題となり、1860年西部への奴隷制度拡張に反対するリンカーン（Abraham Lincoln: 1809-1865）が第16代大統領に当選するに至って、1861年2月奴隷制度擁護を主張する南部7州が連邦を脱退して独立し南部連合を結成（アメリカ連合国）、これを認めない北部との間に戦争が起った。戦争開始段階では南部が優勢に戦局を展開したが、将軍グラント（Ulysses S. Grant: 1822-1885）（後の第18代大統領）が北軍最高司令長官に就任することから北部側優勢となり、1863年のゲティスバーグの戦いでの勝利により北部優勢は不動のものとなった。1865年、アメリカ連合国の首都リッチモンドが陥落して南北戦争は北部の勝利に終わった。
- 59 「弔鐘」とは死者をいたんで打ち鳴らす鐘のこと。ここでは大戦後に自由主義が死んだという意味。
- 60 「白国」とはベルギーのこと。ベルギーはかつて漢字で「白耳義」と記された。
- 61 ドイツの賠償金額については、「二 ただ二途あるのみ」（芝田、前掲訳、2017年）訳註

- 31参照。
- 62 1929年10月、ニューヨークのウォール街にある証券取引所で株式相場の大暴落が起こった。この暴落は、それまでの景気の下降傾向を一挙に加速させて恐慌を惹起し、工業生産は急速に低下した。また、1920年代の好況から取り残されていた農業は、恐慌の結果、生産物価格が3年間で4割以下に下落し深刻な打撃を受け、破産した農民の土地が競売に付される事例が多発し、一部では農民の暴動騒ぎが発生した。さらに、恐慌は1930年には金融恐慌へと拡大し、有力銀行の閉鎖や倒産が相次ぎ、各地で取り付け騒ぎも頻発した。企業の閉鎖や倒産、操業短縮によって失業者の数も増大し、就業者も給与・賃金の引き下げを余儀なくされた。1932年末にはアメリカでは労働者の1/4に当たる1300万人が完全失業状態にあったといわれる。
- 63 コミンテルン (Comintern) とは、共産主義インターナショナル (Communist International) の略称で、第三インターナショナル、あるいは第三インターとも呼ばれる。1919年3月にモスクワで創設され1943年5月まで存続した各国共産主義政党の国際統一組織。詳しくは、大塚桂、芝田秀幹 (補訂) 『ソーシャリズムの論理』 (泉文堂、2016年) 参照。
- 64 「モンロー主義」とは、欧米両大陸の相互不干渉を主張するアメリカ合衆国の外交原則。1823年に第5代大統領モンロー (James Monroe: 1758-1831) が議会への教書で「モンロー教書 (宣言)」 (Monroe Doctrine) を発表して、ラテン-アメリカ諸国独立に対するヨーロッパの干渉を拒否したことに基づく。孤立主義政策。
- 65 サン・ピエール (Charles Irénée Castel, abbé de Saint-Pierre: 1658-1743) はフランスの聖職者、著述家。1695年フランス・アカデミー会員選出。1712年スペイン継承戦争を終結させるためのユトレヒト会議に出席、これを機に『ヨーロッパ恒久平和』全3巻を執筆・刊行 (1713-17)。「諸国民の最高法廷」設置の必要性を訴えた。また、カント (Immanuel Kant: 1724-1804) はドイツの哲学者。近世哲学を代表する最も重要な哲学者の一人でドイツ観念論の起点となった哲学者。『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の三批判書を発表。また、カントの政治哲学書『永遠平和のために』 (1795年) では、恒久的な平和状態へと近づくために世界市民法と自由な国家の連合が構想された。
- 66 「浜の真砂」とは、数のきわめて多いことのたとえ。石川五右衛門の辞世の句が有名。「石川や浜の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」。
- 67 「ヨーロッパ新秩序」 (New Order) とは、ナチス・ドイツがヨーロッパの征服地で確立しようとした新秩序のこと。ヨーロッパ統合構想。ヒトラー自身も「1941年という年は、ヨーロッパ新秩序の歴史的な年であると確信する」と述べていた。
- 68 「東亜新秩序」 (大) 東亜共栄圏) については、「三 政府への進言」 (芝田、前掲訳、2017年) 訳註51参照。
- 69 「言うは易く行はるは難し」とは、口で言うことは簡単だが、それを実行することはむずかしいということ。中国前漢の宣帝の時代の桓寛が撰した書『塩鉄論』『利議』より。
- 70 「旗幟」とは、旗と幟 (のぼり)。旗印。また、表立って示す立場や態度、あるいは主義・主張のこと。
- 71 「荆棘」については、「四 国民への警告」訳註23参照。
- 72 「踏阻逡巡」 (しそしゅんじゅん) とは、あれこれとためらい迷って動きがとれなくなること。
- 73 社会思想研究会編『河合榮治郎全集』第1・2巻 (社会思想社、1968年)。
- 74 社会思想研究会編『河合榮治郎全集』第14巻 (社会思想社、1967年) 所収。また、河合榮治郎研究会編、西谷英昭・川西重忠編著『河合榮治郎著 学生に与う：現代版』 (桜美林大学北東アジア総合研究所、2014年)。
- 75 これら三論文は、「時事評論集」、社会思想研究会編『河合榮治郎全集』第19巻 (社会思想社、1969年) に収められている。
- 76 「欧州最近の動向」、社会思想研究会編『河合榮治郎全集』第6巻 (社会思想社、1968年) 所収。
- 77 以下、現代語訳を施すに当たって表現を変更した点と表記を変更した点を掲げる。なお、漢字から平仮名への表記変更は省略する。【表現の変更】 余す：残す、余るところがない：足りない、あらせられる：いらっしゃる、安危：安否、異境：異国、幾人：数人/何人、一意：一心に、いつにても：いつでも、いわんや：ましてや、動きの付かない：動きの取れない、徒に：むだに/むなしく、一朝：ひとたび/すぐさま、一に：ひとえに、苟

も:仮にも、況んや:ましてや、受く:受ける、映ずる:映る、往時:かつて、往来:道、往来する:往復する、慮って:考慮して、をや:はなおさらである、かかると:こうした、係る:関係する、火急:緊急、赫々たる:華々しい、かくの如き:このような、果断:決断、下附:交付、雅量:度量、看護卒:看護師、緘する:閉ざす、関する:関わる、疑惧:疑問・危惧、窮境:苦境、及落:合否、俠客:侠客、局:部局、去就:進退、遇する:処遇する、苦衷:苦渋、位する:位置する、蓋し:思うに、原因する:起因する、幻影:幻想、言責:言葉の責任、攻究:研究、好人物に過ぎるし:人が好過ぎる、高調する:強調する、毫も:少しも、孤衷:本心、国民社会主義:国家社会主義、如くに:ように、殊に:とりわけ、刻下:目下、語を続ける:言葉を続ける、際会する:遭遇する、定めのない:定まらない、さまで:そこまで、されど:しかし、さればとて:だからといって、散ずる:(カネを)使う、而して:そして、然らずんば:さもなければ、然らば:それならば、然り:そうである、然らず:そうではない、然るに:それなのに/とところが、如くはない:匹敵するものはない、市井の:市街の、親しく:直接に、實際家:実務家、集合:集会、執心:執着、首級:首、初一念:初心、将士:将校・兵士、消息通:事情通、徐々として:徐々に、爾来:以来、仁義を立てる:仁義を守る、心事:心中、少しく:少しでも、成心:下心、切言:忠言、せしめる:させる、戦役:戦争、遷延:順延、詮議:詮索、詮議立:詮索、戦端を交える:戦闘を交える、全的に:全部、宣明する:宣言し明らかにする、煽揚する:煽動する、窓牖:窓、壮挙:快挙、挿話:逸話、素志:宿願、大事:一大事、大体:大方、畜に:単に、立ち竦む:立ちすくむ、磔刑:はりつけの刑、給う:下さる、中外:内外、佇立する:たつずむ、通俗に:俗に、亭々たる:高くそびえる、ドイツ労働党:ドイツ労働者党、東亜:東アジア、動因:原因、道破する:明言する、兎角に:色々な、独立独往:独立独歩、ところへ:そこへ、とて:といて、なかりせば:いなかったならば、為す:犯す/行う、嘗める:経験する、なるほど:確かに、俄に:急に/すぐに、年:歳、残る限なく:残るくまなく、宣う:仰る、測られざる:計り知れない、拍車を加えて:拍車を掛けて、旗を挙げる:旗を揚げる、罷業:ストライキ、蜚語:飛語、一道:一途、披瀝:披露、兵火:戦火、風声:風評、耽る:没頭する/酔う、不正当:不当、平生:普段、平生無事:平穩無事、～べからざる:～ことができない、別:違い、報知:情報、勃然:突然、曲ぐべからざる:曲げるのでできない、全き:完全、万巻の:数多くの、蹒跚と:する:よろめく、身に体して:身にとどめて、面を背ける:顔を背ける、目睫の間に:目の前に、模糊として:曖昧模糊に、固より:もちろん、虚しく:謙虚に、約:約束、所以:理由、よしや:たとえ、輿望:所望、累卵のような:度重なる、陋風:悪風、露台:バルコニー。【表記の変更】浅臺:浅はか、亜細亜:アジア、更めて:改めて、いうを俟たない:いうを待たない、到る:至る、逸早く:いち早く、嫌が上にも:いやが上にも、巖:巖(いわお)、因襲:因習、薄霧:薄もや、奥床しい:奥ゆかしい、行なう:行う、慮れる:恐れる、墜ちる:落ちる、篝火:かがり火、攪き立てる:かき立てる、攪乱:攪乱、蔭:陰、蔭口:陰口、箇条:か条/条文、劃期的:画期的、確乎:確固、活潑:活発、鎌倉政府:鎌倉幕府、彼等:彼ら、萌す:きざす、議する:議論する、逆襲:逆襲、鞏固:強固、軽卒:軽率、高処:高所、業病:難病、声を揚げる:声を上げる、心遣り:心やり、姑息因循:因循姑息、耐忍:忍耐、奇蹟:奇跡、昂揚:高揚、気魄:気迫、好機到れり:好機到来、広汎:広範、媾和:講和、国際聯盟:国際連盟、珈琲:コーヒー、これあれ:あれこれ、頹廢:退廃、断乎:断固、最高頂:最高潮、詐偽:詐欺、坐して:座して、サンピエール:サン=ピエール、布く:敷く、支那:中国、支那事変:日中戦争、袖手傍観:拱手傍観、知らず識らず:知らず知らず、充分:十分、詮ない:仕方のない、殲滅:せん滅、副う:沿う、綜合:総合、擡頭:台頭、耐忍:忍耐、堪える:耐える、仆れる:倒れる、鍛錬:鍛練、智識:知識、智者:知者、中支:中国中部、地を払う:地を掃う、付きつける:突きつける、特種:特ダネ、処:所/ところ、弗:ドル、抛つ:投げ打つ、南支:中国南部、何人も:何びとも、謀る:図る、測る:計る、曝露:暴露、始めから:初めから、始めて:初めて、始めは:初めは、果して:果たして、バーデンのマックス公:バーデン公マクシミリアン、ハルデンベルグ:ハルデンベルク、反撥:反発、只管:ひたすら、ヒットラー:ヒトラー、一つ宛:一つずつ、不屈不撓:不撓不屈、附言:付言、仏印:フランス領インドシナ、揮う:振るう、プロシヤ:プロシア、併行:並行、篇:編、抛棄:放棄、茫然:呆然、髣髴:彷彿、北支:中国北部、捲き込む:巻き込む、護る:守る、看做す:見なす、

ムソリーニ：ムッソリーニ、洩れる：漏れる、輿論：世論、ライプチヒ：ライプチヒ、ラムゼー・マクドナルド：ラムゼイ・マクドナルド、联合国：連合国、聯想：連想、敗った：破った、遊蕩：放蕩、由々しい：由々しき、喚ぶ：呼ぶ、よりにて：よって、禍する：災いする。

*本訳出に当たって、現在の河合榮治郎研究を牽引する松井慎一郎氏（沖縄国際大学沖縄法政研究所特別研究員／聖学院大学人文学部准教授）から数多くの貴重なアドバイスを頂戴した。ここに改めて深甚なる御礼を衷心より申し上げる次第である。また、本訳出は、平成28年度沖縄国際大学特別研究費（その他研究）を用いた研究成果の一部である。